ヲ 9
3733

ヲ9
3733

手筋の栞序

草物理を背くへからす立
生へけれは花の無す事和
漢ともに其本をしらさる花を立
古より今に咲ける花を愛し山野
水辺の草木を小瓶にうつし
あるは山を見つゝへる摸して

門 ヲ 9
號 3733 巻
昭和九年九月二八日 購求

雅（ガ）席（セキ）は茶は風流となれのおもむき
也彼の心の無き人情なきことゝ去
嫌ふ事をなす奇さらすまし
是よりはしまる是を知らは人自
然へ至るへし亦古人をまなひ
言よ此好き好む者（トシ）あらは
吾斎（サイ）門をたてゝ同志此論を

友とすれは心おのつから最集めん
事なれ一書あらはし梓（アツサ）に行ちらさぬ
うちにしらるゝ人すくなけれと辞（ジ）
しつゝ心見るへからす久し
ならし喜（キ）婦人長く取らす書つゝり
あはれなる人まことにあらす事感し
無ろ三（サン）ト知らひ志の黙（モタシ）難けれは

是はこの草稿(サウカウ)を撮(サツ)く見に標号(ヘウカウ)あらん事字書無千態(カタチ)を像てこゝ流を志すものよりて手本とし乃不日もし唯く可ならん也

明和丁亥冬

酔花斎 玉蟾識

補篆

千筋生麓

初學生方

前巻之上

前巻目録 上下

一 挿花大意　流行の説　不易の説
一 専ら器に屈さる事　偽なくして生さる品事
一 茶室に挿ふ器の花の事
一 花挿やうの秘法
一 初学いけかた指南図式
一 百段切生方の事
一 獅子口の花筒生様の事
一 二重切いけやうの事
一 籠花生やうの事
一 及安切の筒活やうの事
一 置花生活の事
一 客居の花に移花の事
一 釣船并置舟花挿やうの事　并釣瓶
一 花器によりて花生やうの事
一 仮り添ふる花の事
一 庭おもてある草木花姿にいけさる事
一 夜るの花生やうの事
一 出り花の事
一 祝儀元三の花の事
一 移徒の花　餞立餞別の花　追善の花
一 五節に用ふる花　并四季草木花の名義大概

後巻 上下

一 古人の花図式

一お茶挿方の器式
附録の巻
一生花実名を兼たる花挿様
一活花の図式
一茶室口伝の許文大概
一人々花を好る礼
一草木の花包ミの器
一花道諸事寸法
一四季花こしらへ花折へ包ミの秘事

挿花千筋の麓 前之上

東都 入江玉蟾撰

○挿花大意

凡挿花初の立花の起ハ吾朝のむかしにあれ唐土にも其例ありとて袁仲郎文集瓶史瓶華譜或ハ瓶花史を著てすべて皆其理吾朝の挿花に当つてなほ是を證としこれを諸ニ別なると忌こ縄をひく反張(ソリハリ)ハ風事と忌むともあれど花の文化に応じ根を緘(トヅ)るものなしぞや古今の當時足利将軍の比よりぞ行はれ香花(カウケ)ハ手向の具なりといふ

座上の飾とかしく祝儀に用る事となれりか
其姿を常に置花掛花ての好む所にまかせ行く
一室に天地自然の造化一枝一花の勢ひ聖に
園中深山幽谷溜池の形を備ふるを称して
衣の物のたのしみとなすは何程此上のあらんや
爽に綻ひうる梅が香の潤ひくらく麗なるはいか
燕子花河骨の水清涼しく秋ハ野草のいろく
芝生に交る菊の錦水仙寒菊山茶花の雪を
挿ありて挙にさふ一と時の変化をもて壺中にもえ
寔に仙客霊友の術にてもしとやいふも宜なり

○流行変化の説

當世業の湯の花とし〱好者の翫ひ捴ふして
折の道花あり習ひなとあるにいひなししかも
是根元とたづぬるに業といへるは往古より猿
なまりすと称ふ佛道を尊ミ祖師高僧知識の
金仏を拝して用ひ花を愛して朧藝華
と観しさうしも山林幽谷出生溜池の様ひを
模し侘らし躰をも愛し仁道を弥ひ禮儀
を厚くなすを最第一となれ志のしも此
生入の心ちを有ましこそは藤田緒鷗なくる

数奇屋にて客多くとも濃茶ハ一人一服にして
のみしを文明ニて好んで今の濃茶の式
おこり香を聞し香炉をかざりて茶入を
茶壺を自然と飾るなどありしかば千宗易
の時生入花の妙味はいふなり後古田織部の
ころに茶道ハいよいよむつかしき形になりて
中く花の葉まで下枯の輩老人の翫ひにて
事くなりしを深く意あるを多しまた寛永
年中小堀遠州公ほどよしく細口の瓶にまで小
花瓶をつくり生始めしより其の例となれり

生入花ハ習ひなくて順花の出来ぬ出来ぬ
段をもつくるを評せんや夜をもつて知るべし

○不易の説

茶道吾翁ハ昔ハ東山慈照院殿などより
ろしく又花ハ風流を好ミ給ひ珠光ならびに紹鴎
休り千宗易ニ至り業妙に富ミて世ニ知られ
なりわつかに道安花ハ妙しくして形はおの
こころのまゝにて又世ニ抛入とよバるる茶人
無造作ニて枝葉花の形なるまゝや客ニ対し
ての粗末の詞家門の徒抛入と呼ぶも

是を称の立花と称しても茶室小座敷の飾
とするも亦書院座鋪向にハ生花と称しかたし
専用也往古よりさまさまに変ある所に
二ツなし是く古人の志帰ふ所を弁へ尽して
家意形状を求めて其草木の心を知り出生を
背一は用ひて曲節地の三ツと陰陽の体を
まれも変化自在を尽さしめ古人の縊索
背く事なんや十草花造化微妙の姿必ず
出生の体たる事のかたち変に古人にならひて
術を用ゐ形に行ふへし

○専婦に用る条々

一 十文字見切丈ちかひの事
一 一花一葉四花四葉六花六葉二つ足くの事
一 葉ふかく花見えへざる所やうに活くる事
　但巧者は見ゆる葉うれの花に苦
一 花葉に落うち所せざる事
一 天井壁をとへ花葉の枝ささはる事
一 花枝葉のまざる事
　但水仙の葉に苦　口伝
一 茶あしらの葉ふだうり葉の先端花ちらり用ゐる事

一同し色とある方へつかふる
一傍道具の方へ枝葉長く出したる
一時ならさる花の事
但梅り花を用也　口伝
一花葉相手もなき事
但蓮沢首ハ不苦　口伝
一枯葉ふ虫喰ひ葉ふ折れ葉痩たる葉ふつかふる
但るかや居足も用　口伝
一結搦しく生ると嫌ふ所なる
一二花二枝つかふる四ヶ六ヶの事

一花茎なかく〳〵生ると嫌ふ所なる
一花の輪針隠しのことく両へ見へると嫌へなる
一同し色の間へ外のいろとのなる
一花と葉の流るゝ中へ外の物と入るゝ
一花見ぬまゝなと香の無き名の知さる物ふ一の生る
一両面へ長く出る枝葉の事
一私の鎖釣瓶の縄繁のほか枝葉ふみたく見へ切さる
一花枝一種二種三種小隠る所さる事
一花もかハる癖ある活形つかふる
一多く解く生ると嫌ふ所なる事

一 一瓶對花ハ忌なり
但婚礼ニ用ゆる 口傳

一 掛物の絵人物禽獣の面と花むかく見切るなり

一 同名の花並ぶへく隠しきるなり

右二十七ケ条ハ古人の法度とせ給ふなくあらハしを

○茶室に禁忌の花あり

茶の花 荻 萩 沈丁花 鶏頭 大百合 鬼薊 三ッあり

一説ニ 木瓜 つゝし 金絲花

金銭花 金盞花 同名異種のもの口傳附録に出す

右十家五ケ条のうちに禁忌を此外に想しく尖針ホ

のある草木実の類を用ひず 枝柿子 柚のたぐひ用ゆる口傳 毒草毒木の類多く吟味すへし又生ことに云ふ規あり当代の茶人右の文ニ迷ふことなくいけ花ニ不拘といふ也

適生八箴曰

幽人雅趣雖埜草間花無不排几案以供清玩取自家生意原一定成規不必拘泥

此語よろしや是ニ瓶史と渉猟あれハ全く是生道の事なる所尽し

古歌

みどりなるひとつ草とぞ春ハ見し秋ハいろいろの花にぞありける

何と見く見てぞあれ秋の野の芝生にまじる花のいろいろ

○傳なくしく挿さる物

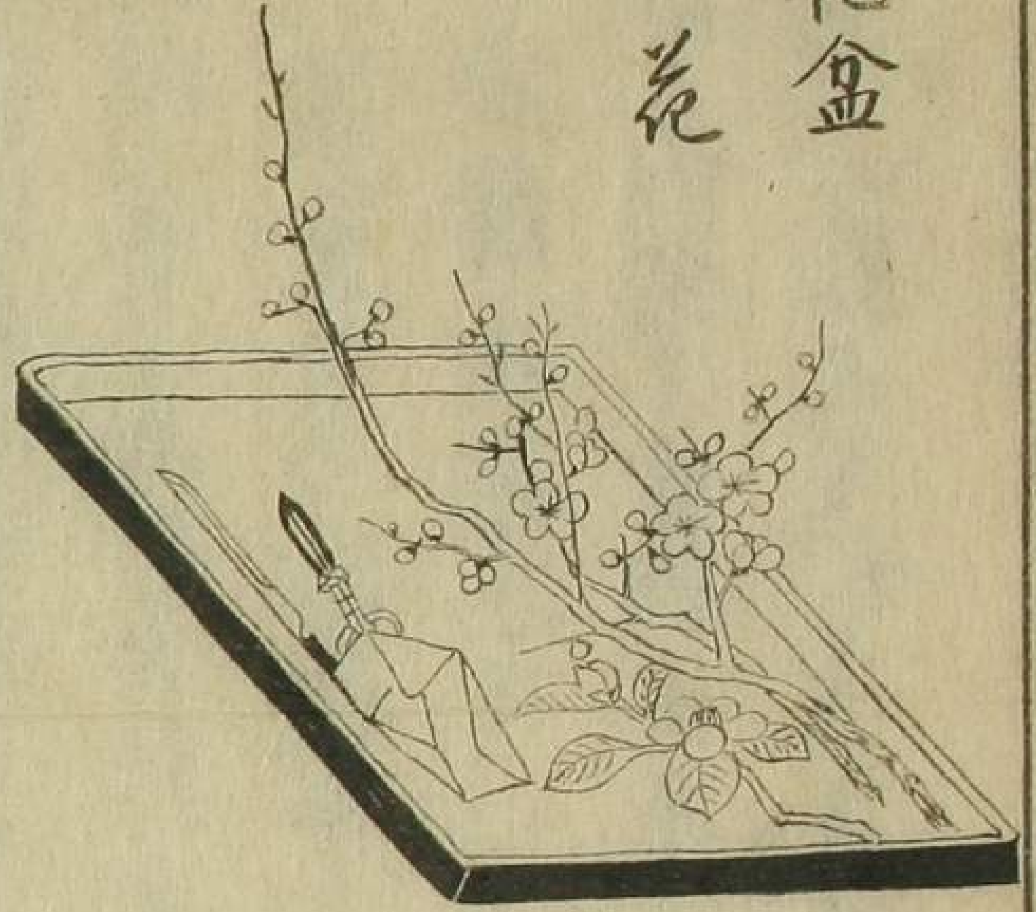
一　一輪一葉の椿　　一　一輪牡丹
一　河骨沈え花　　一　河骨獅子口の事
一　老母草の活形　　一　一花一葉燕子花
一　一花のうきつたる　　一　二重切上ハ草下ハ木のるる
一　竹を活る事　　一　水仙口葉六花
一　松竹を活る事　極秘
一　右十余ヶ条ハ修行なき人ハ用捨有べし深切を以て
師傳を授るべし

挿花千筋の麓　前之下

東都　入江玉蟾撰

○花挿様の作法

先花盆へ花并小小刀鋏布巾なとを揃へ床の左の方へ盆
花器の居りい能とくと極め水七ゟ目を入置べし以上用
済ハ床の左の方ハ盆へ水次なとくしとも
とつき床より三尺ほど引て心志をはなくと見定後水次
花盆鋏手へ持入置し布巾ハ花生落板を拭く為之容へ花
形定の時も右の和亭を持出床へ居へ形定りて又引く
切ちらしたる枝葉ハ奇麗に嗜むべし則花盆図のごとし



○初学挿花指南図式

花ハ花器との釣合浅深ありて殊に出来不出来生ずべし先
器と見くらべとり合せ趣向を定め活る所へ心なく
花葉切ちらし置べし

陰陽 表裏 長短 相生 釣り合 心得べし
客居主居を忘べからず客居とは上座之主居とはいふ
亭主の坐なり右客の法度と心得べし
水際奇麗に生る事心得べし
花盆の外へ多く塵を出さぬやうにする事嗜むべし
右の心をよく挿法の条を守るべし

花拵

ぬけ生る

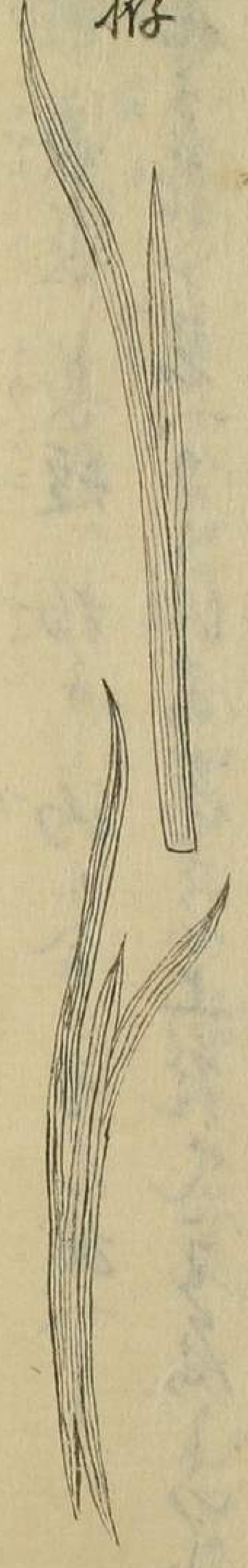
〇此挿花をひらく折入も花と云

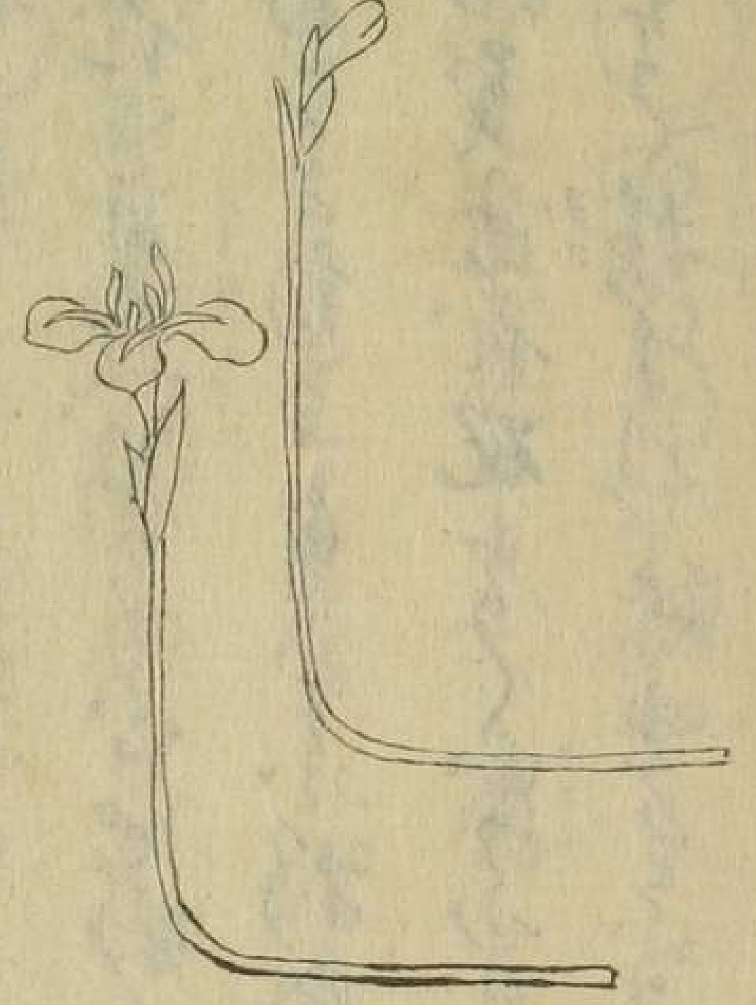
花くゝり小枝なとしても手際出来るなり

又広口なる物ニ燕子花(カキツバタ)盛ちなれ似たる挿る手際図の

ことし葉茎(ソコツキ)短(ミシカ)く時ハ竹を添へし若クハしめたる程く

梅

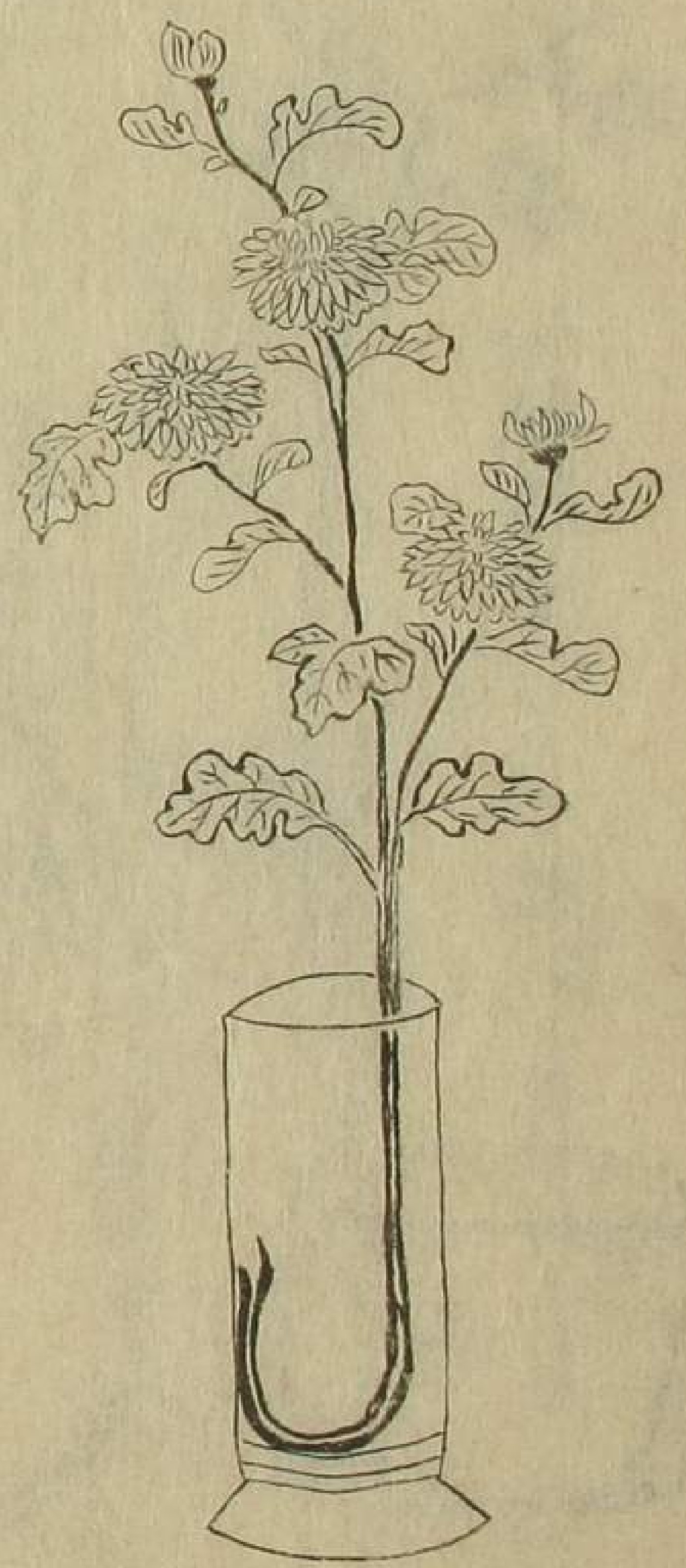




且又あふぎなとハ茎(ツキ)こゝくとかく短(ミシカ)く切りてそこその

なれハ別図のことく足竹を用へし

夏菊は茎(ヅキ)こはきもの多くありて枝へましと思ふ時
それる物あり又茎やはらかなるもあり花瓶に剥れぬ
ぬ花と見へ花の心を知るへしといふてといふなり
秋菊は菊は自由に枝のしなやかなり
武流茂に花配なくいふに水中寄藁なれはとかく花の立
かたなく横(ヨコ)に枝をさし出生にかなはぬ一流なれと猶に及ハす



○百度(ワンド)切に挿やうの事

一 またく挿花生ふハ靡(ナビキ)ものゝしらぬ梅なとの類も
下(タ)葉をしてし生よし次の圖式の花に形とあらはす
此花生一節(ヒトヨ)切(キリ)とも云置(ツキ)にも用ゆ

○獅子口生形の事

一 輪(ワ)に枝葉にあまりぬやうに活へし或ハ輪を挟く生
る事あり口傳ありしく附様よくいはしく述る此花生
花家にも鰐口(ワニクチ)とも云と古実ありしと知るへし

○二重切活やうの事

一 上の重に花を生けて下の重に水ためて置へハ

是則山水の姿なり又客よ花見る時ハ上の重よれ
ちらり入亭主下の重よ花を生て後客よ花のるしむ
序し是皆又利休翁の古実あり附録ニ出

或花伝書ニ曰亭主より重を造る客生る時ハ下の重ニ亭主
生さる花を造ニ上の重ニあけ客下の重ニ生るべきと
ニ説あり哉ニ花の家ニよりて用ひ又ハ是亭主ハ花を剱り
らるべし客ハ未熟の人とミへたり

○籠ニ花生やうの事

一籠ハ常ニ繁く生へし或ハ手のある籠耳ある籠ニハ
花葉多く見ゆるやうニ挿へし亦置籠あり
生やう同前たるべし

○居安切の筒生やうの事

一上の重ニも下の重ニも活へし或ハ上の重ニハ靡きの
花のるべし二重切同前也此花生楼切とも云

○置花生居の事

一置れるものハ組合さるゝものゆへ初学挿方の圖式ニくはし
兼ねるべし

○客居の花ニ祝花の事

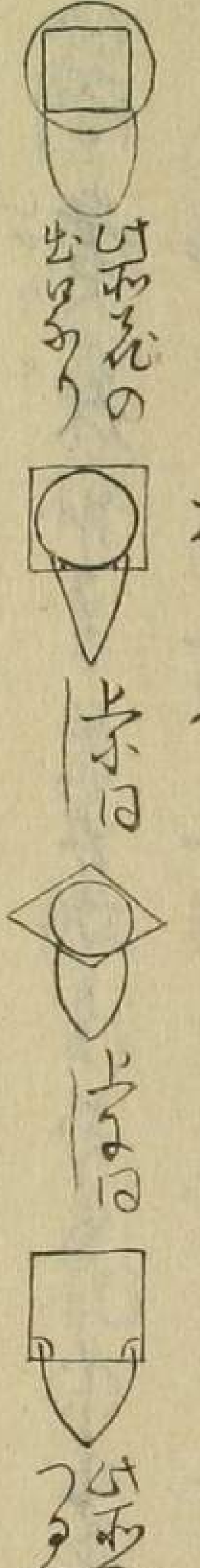
一祝花を生る時ハ客居の方へ活へし或花短くさる
延やかニ生るべし貴義の心なり

○釣船并置舟花生やうの事

一釣舟並ニ船ともに出船入舟泊り船走り下る舟にも生け様々
生方あり艫櫂碇(ロカイイカリ)の心持を生べし圖の通に心要し
夜に門人の尋あり船に水を渡海面の相なるを床の高さ
所につけ釣舟ともいふ又並舟とも云是ニ高く釣り生ることいふ物や
布並にて釣舟ハ沖の舟を遠く見るらんと知るべし鎖(クサリ)を付るに二節
なり並船にもいふなり別紙書に委細に明すなり
又古人の他に沖筒と云花生あり世行に切用る舟の花生船
能く似たるを見て謂く生るといふ二節之前時行舟花生を
こゝに鎖二節の物置し舟と云名目なくも必ず鎖なるべし
左の圖式にあらハす

○花生に入り花いけやうのこと

一總じて花の出口容器を定べし角花生の隅(スミ)へ
生るあり拙(ツタナ)き業(ワザ)なり同じく花出口を圓にあるといへども



扇板も危き花器なる角なるを用ひ角形花生も
丸き板を用ゆ丸きハ陽の象(カタチ)角ハ陰の象之自然を
陰陽合体(カツタイ)備(ソナワ)り古人の物なるゆゑかくのごとくなるぞ。
天ハ圓(マドカ)なり地ハ方(ケタ)なりといふ

○俄(ガ)り葉ふり花のこと

一椿に木槿(ムクゲ)の花と俄ア燕子花の葉(ハ)弱(ヨワキ)る時ハ
盛ハ心あふきの葉椿に葉の花なき俄の用ゆるに是
といへるは何も立華家の業なり挿花に古人用ひ

る例となりても知り其程時宜により砂張(サハリ)器なるへし
必時候(シコウ)にたかふものハかん付る事なり
○座敷にある茶事と座敷へ生さるゝ
一此条挿花に心得つるの中一く庭上(テイシヤウ)に咲たる数々の
られ生変へかしれ利休翁座敷に蕣(アサカヲ)盛の
節太閤秀吉公御所望に付被為　成けるに利休の庭
に咲たる花を皆取一輪も残さすむしり捨(スツ)
囲(カコイ)の床に只一輪茶の湯へ生け置かれけるを
太閤賞美(シヤウビ)ありて絶なりしとぞ誠に面白
しき事なり此類多く兼て有へし

○夜会の花生様の事
一夜会の花挿方に口伝あり花の色かたちかわる也 口伝附録に出
○出入花の事
一茶席に順花といふ事あり茶式に依て亭主花を
花器を床へ持出床の柱に掛水指とも床へ連座
の客に挨拶して上座より生け始順々列座に於
挿る事なれハ是又稽古のためにて一種の花列坐順に
いけ花形の甲乙をいふ真いとも又此業一種の花にて
花形の変化をなすを稽古とする
○祝儀花の事

一祝義花ニハ松竹と定まりたる格秘にして書伝ふ
かくのごとし 但切の事ハ師伝を授へし
○移徙(ワタマシ)の花の事
一新宅移徙ニハ赤色の花を忌ミ百合花をきらふ
きらひむきあふひの類ひの字を呼梅花をもきらふやくを
へしとハ古人の伝なりと 水仙 水木或ハ木色ニ縁ある類も皆嫌へきなるへし
或書ニ曰移徙ニ赤色花を忌むといふハ思勝(ツイリ)の事なり赤
色ハ火を忌むの花といへり神社仏器にていはひの極彩(ゴクサイ)色ニ朱(シユ)
丹(タン)の類を用ゆといふやといふ説あり 又曰昔より附太の
入付けるより世人師ニ聞しより真の神社仏閣ニ及んて八皆白木
之丈高結ニ拵請登意の器具ところにある白木之見事なる所へ
られ結かもせる古人赤色を忌ミとハかしハ古人の遊(スサヒ)を常(ナメ)とするなるへし

又水ニ縁ある事を用ゆへしと書あり 又
此部類花ニうつりよる事にあるを以て水の
縁とハ縁ある事を忌むのなるへし
巴(トモヘ)元来水之象 瓦(カワラ)の屋唐草(カラクサ) 海藻(カイソウ)之鰹木(カツヲキ) 蟇股(カヘルマタ) 鴨居(カモイ) 鴟尾(シキ)
螻羽(ケラバ) 懸魚(ケンギヨ) 虹梁(コウリヤウ) 天井(テンジヤウ)あるひハ彫(ホリ)物の龍(リヤウ)
犀(サイ) 魚虎(シヤチホコ) 雨龍(アマリヤウ) 此類神社仏閣家作ニ用ゆ何れも水ニ縁ある物なり
○餞別(センベツ)の花の事
旅立餞(ハナムケ)の花ニは結(ムス)ひ柳の図あり 図式あり
或書ニ曰唐土にて旅立人を祝する時の留柳(リウリヤウ)條(テウ)と云
古実ありしと見え立花の式にもなく生花の論に及はぬと
又曰古来立花百ケ条或ハ古今百瓶新百瓶 此書の名目瓶花図彙と云

是等を易きに柳と綰(ワカネ)結びて指すを立花なりし
今く挿花の絶えたり古の書なきに迷ふへからずかゝる
石州侯の御家に結び柳とふきたりし是は勝手のる
に取りしをいふ也ふかくと附録に出載せ

○追善の花の事

一追善の花は青花と云ふ也鬼百合(ヲニユリ)鬼薊(アザミ)荊棘(イハラ)等の
除(ノゾク)之時節によりて用ひるの花あり然或書に中陰に
赤色苦しからずさるの大家の御中陰に池之坊も赤色
の花をさしたる例ありさりながら旧例(キウレイ)も其理に應せざる
義は改めて用ゆる諸道の常く此の中陰とく

色花を忌むとやらいふ帝曰元挿花は吾(アニ)仲良文集に
分明なる事に遂(ナツ)一載せたり然れど是を本邦(ホウ)立花家に
拘(カヽワル)へき也先人目安に花の礼と見るに白洲黄亦赤色
なし立花家に花用ゆる是は累花に時候あり
定まる立花家にても用ひるを見て挿花も好
む一流もある人は立花家に泥(ナヅ)む事なかれ

○五節(コセツ)に用ゐる花大概(タイカイ)

正月　梅　椿　金盞花　水仙　つくる　柳　福寿草　福寿艸
三月　桃　山ぶき　さくら　柳
五月　菖蒲　石ちく　[illegible]

七月 女郎花 仙翁花 朝がほ 桔梗
九月 菊

○四時草木花名寄大概

(春)

梅 桂 福寿草 柳 金せん花 蕗(フキ)のとう 紅梅
桃 しやくなん花 山吹 菫 春菊 あけほの菊 鼓草(タンホヽ)
あさゝ 長春 胡蝶花(シヤガ) 桜 海棠 連きやう

(夏)

牡丹 芍薬 卯の花 燕子花 あやめ 岩菲(カンヒ) 石ちく
撫子(ナテシコ) いち八 美人草 芥子 紫蘭(シラン) 姫ゆり 大百合
夏菊 葵 あら香 風車 [illegible] [illegible]
あいかり 鷺艸 河骨 蓮 昼かほ さゆり 萱艸(クワンサウ)

(秋)

仙翁花 夜きの[illegible] 朝かほ 女郎花 桔梗 紫苑(シヲン)
棠 鶏頭 けんとう 夜様子 秋海棠 水あふひ
綿菊 菊 小車 萩 薄 芦 梅もとき二種
黄葉ゟ

(冬)

山茶花 水仙 寒菊 寒椿 寒牡丹 寒梅
つゝじの花 草の常盤なるもの
枸子(クコ)柳

挿花

千筋之麓

古今圖式

後巻之上

早稲田大學圖書

○毒ある草木の大概

一 曼陀羅花　和名てうせんあさかほ

一 躑躅　種類多し五月に咲く黄なる花が毒ありれんげつゝじと云

一 烏頭　花紫なるを俗にかぶとゝ云

一 八重の萱草　毒あり

一 午时花　金銭花と云　くはしくは末にあらはす

右此毒ある花はいけ花には遠さけ入べし尚附画図の
その名をしるし余録にあらはせり其外のものも

古人圖式

利休水盆ニ落梅

利休 獅子口河骨

挿方傳有

利休

馬盥(マタライ)蓮

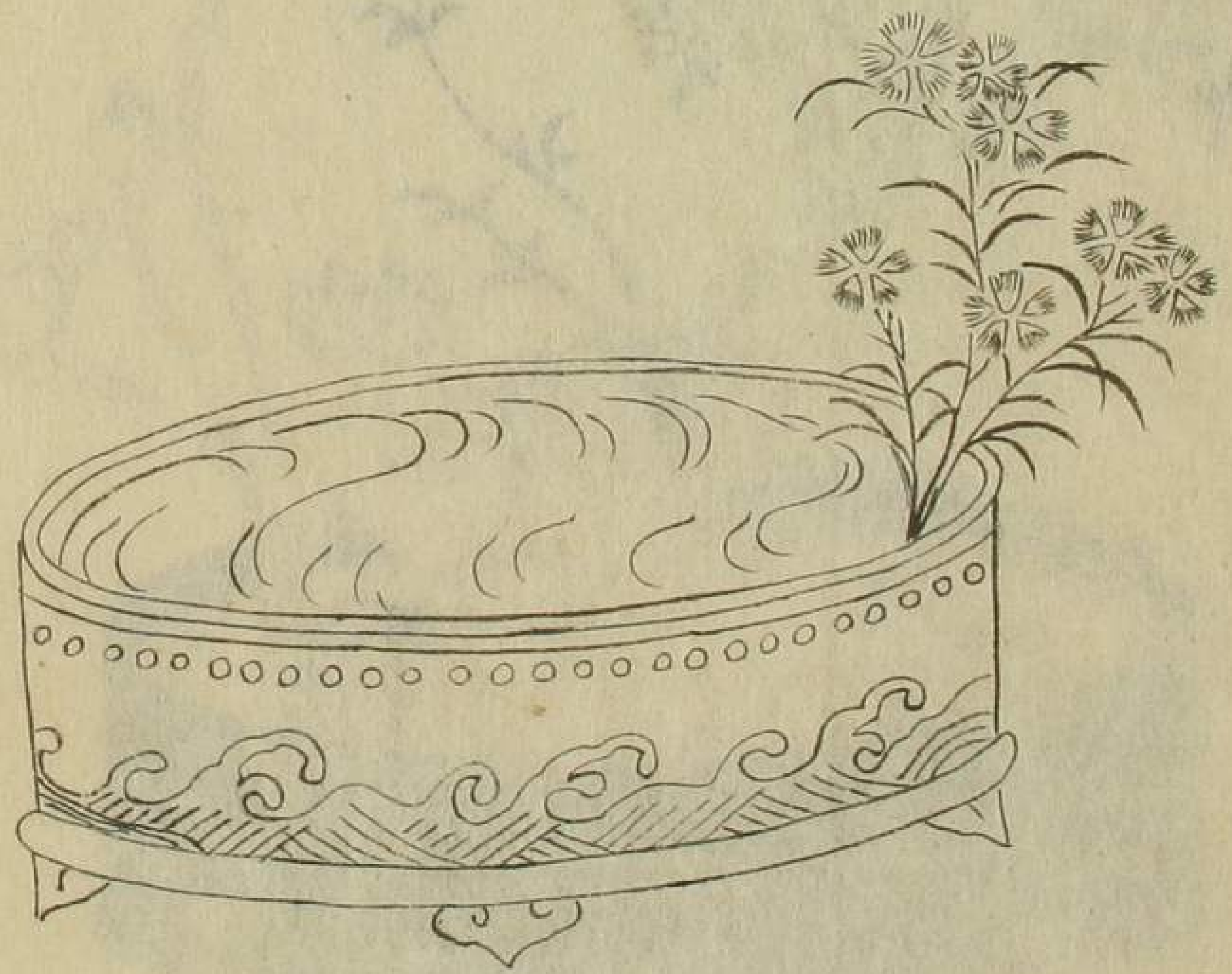
轡(クツワ)組方口傳

道安

櫻

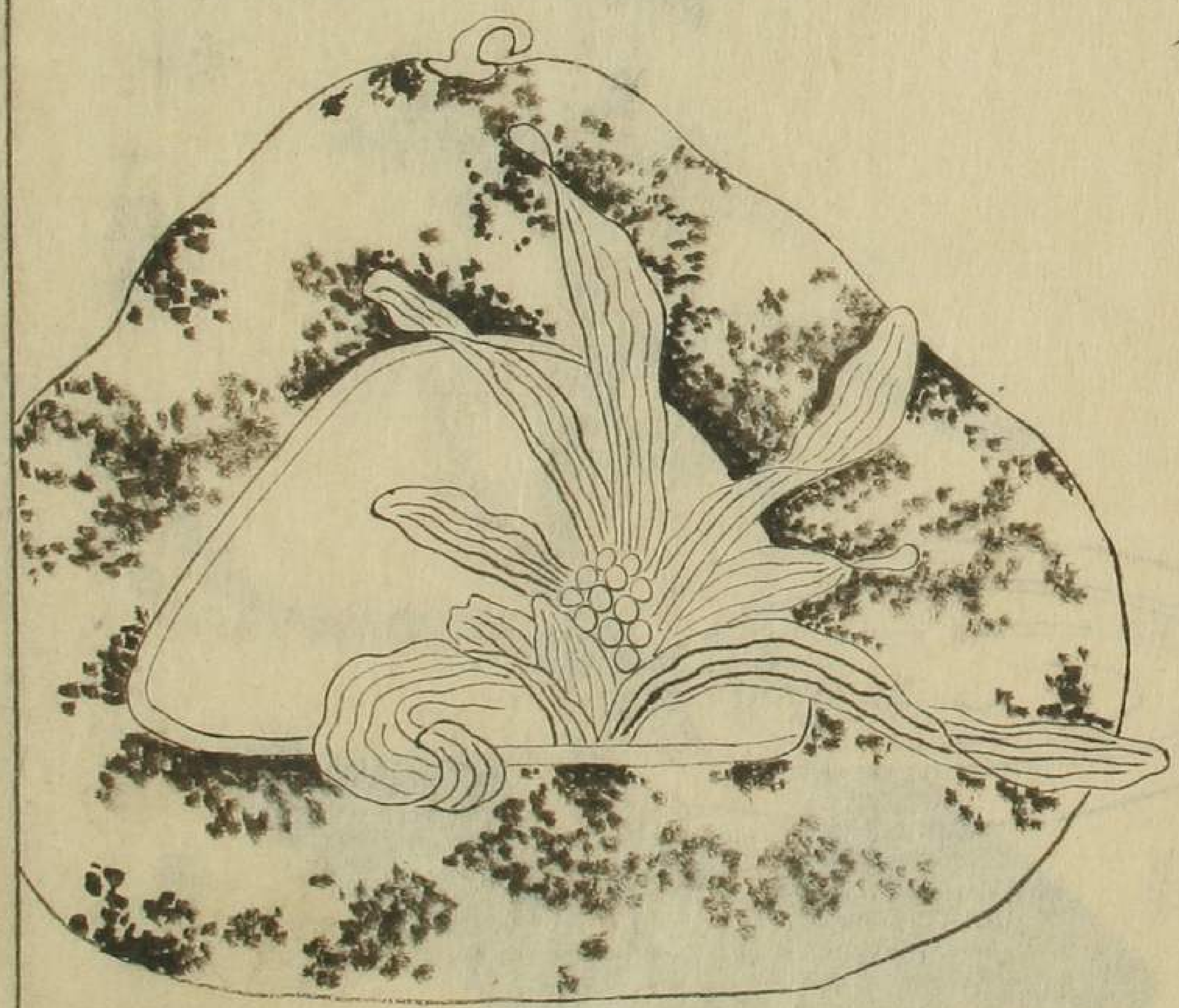
行基焼瓶(キウキシヤウヘイ)

利休小柄（コツカ）生瞿麦（ナデシコ）



道安老母草（ヲモト）鉢瓢（ハチフクベ）傳アリ

又萬年青（ヲモト）



利休雷盆(スリハチ)水仙

手段傳

一名 雪中花(スイセン)

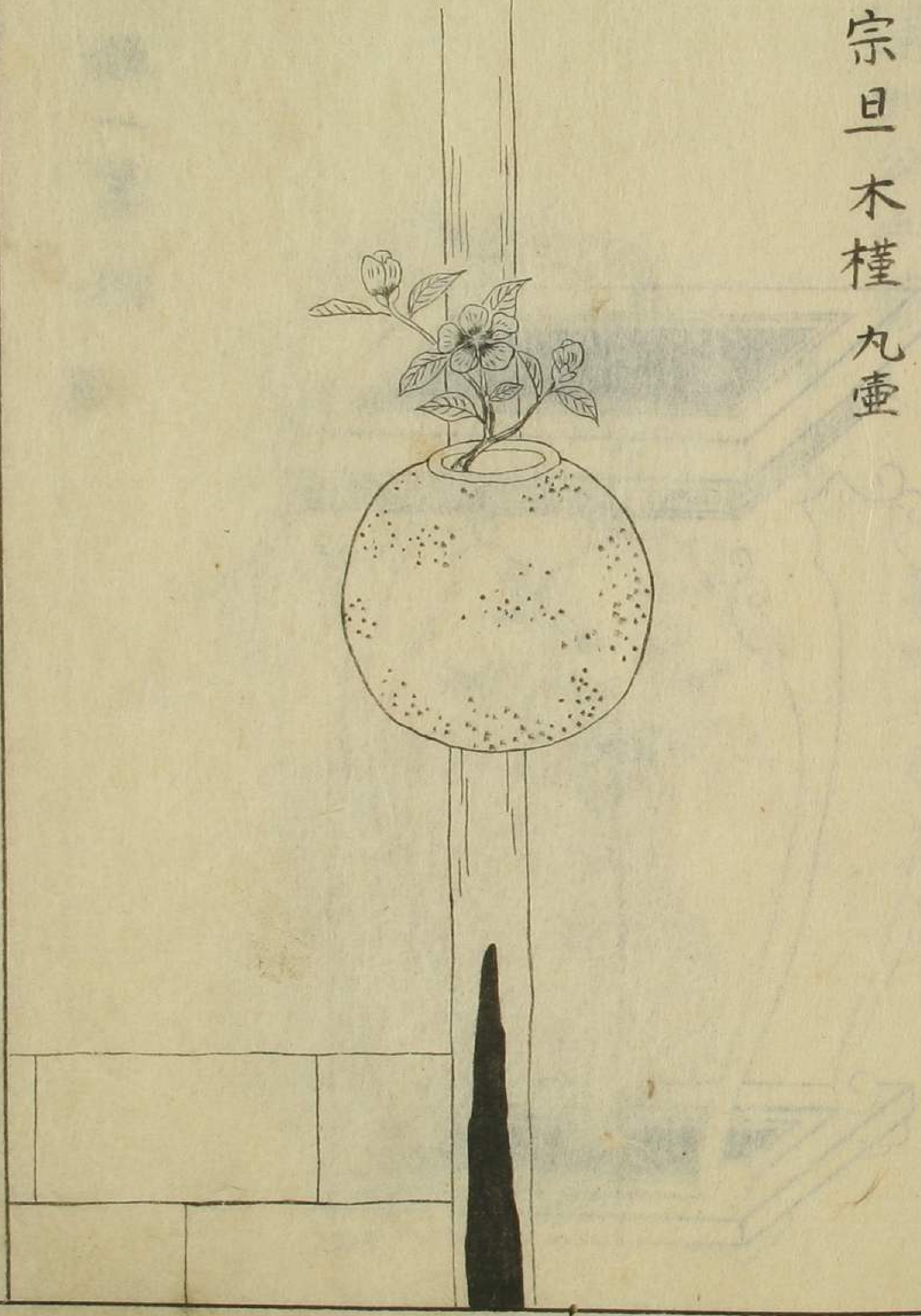
和名 ニハキ

利休一本ト菊

傳

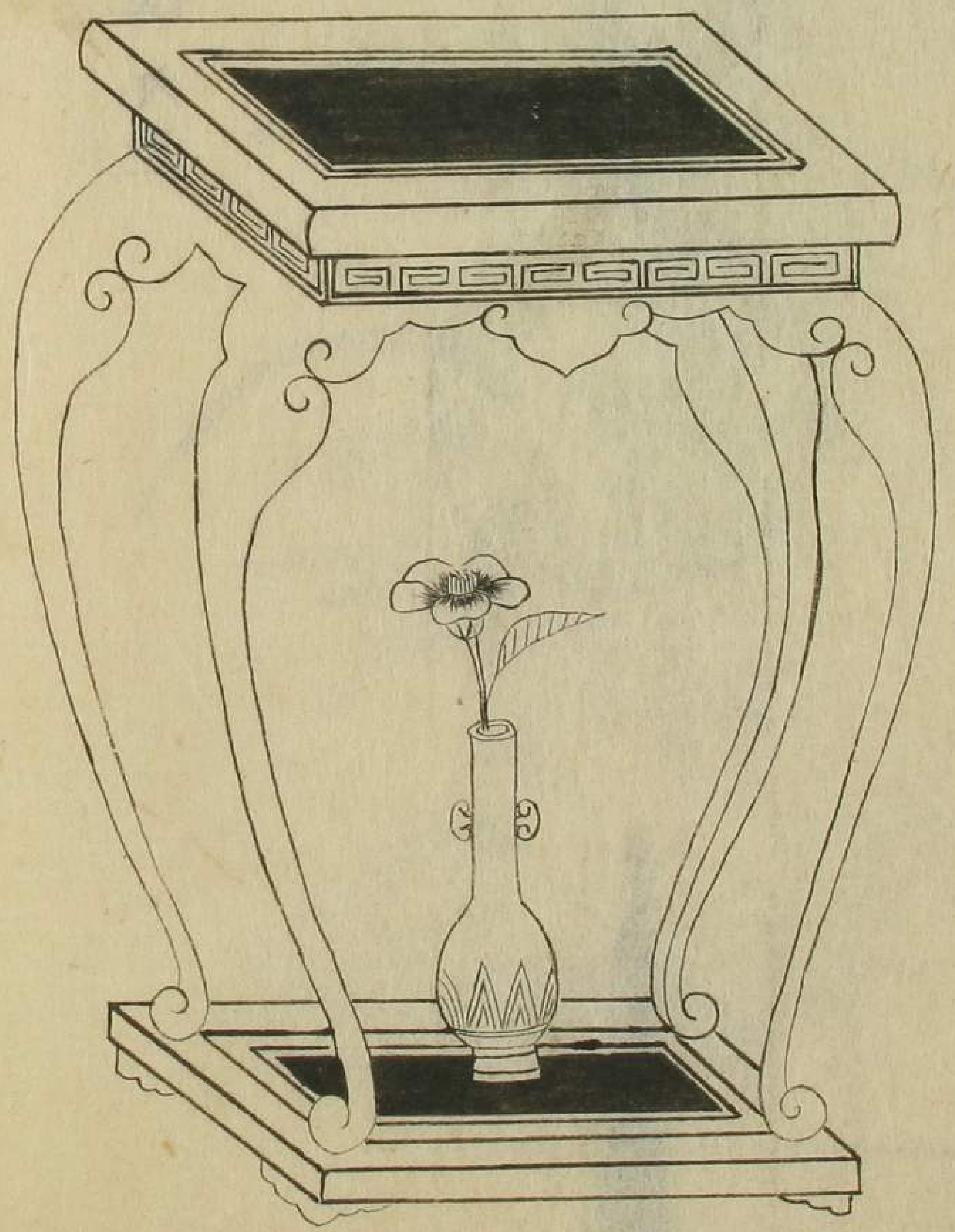
道安 薄ニ雞冠花

宗旦 木槿 丸壷



一輪一葉ノ椿

傳

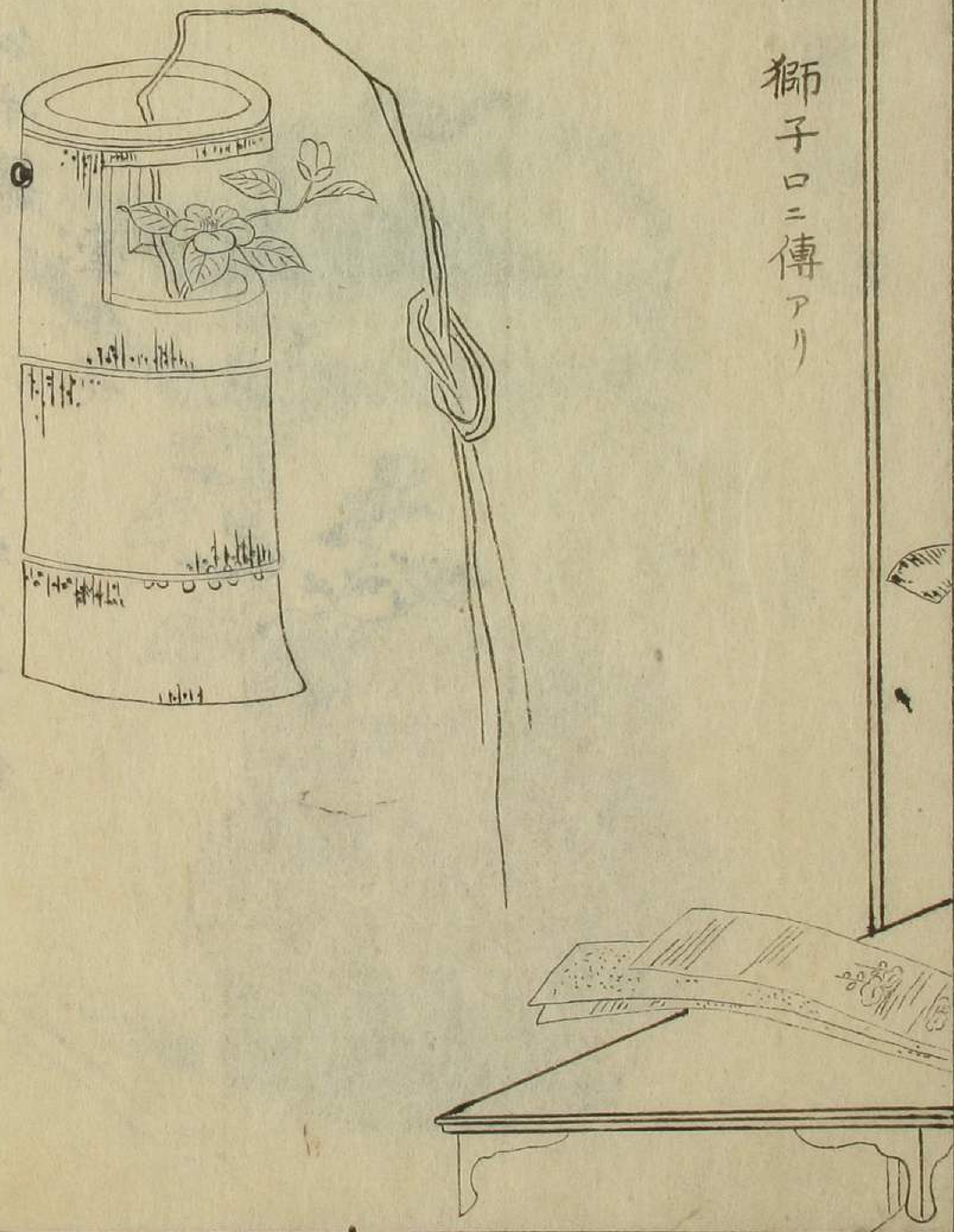


遠州公手籠

牽午花(アサカホ)

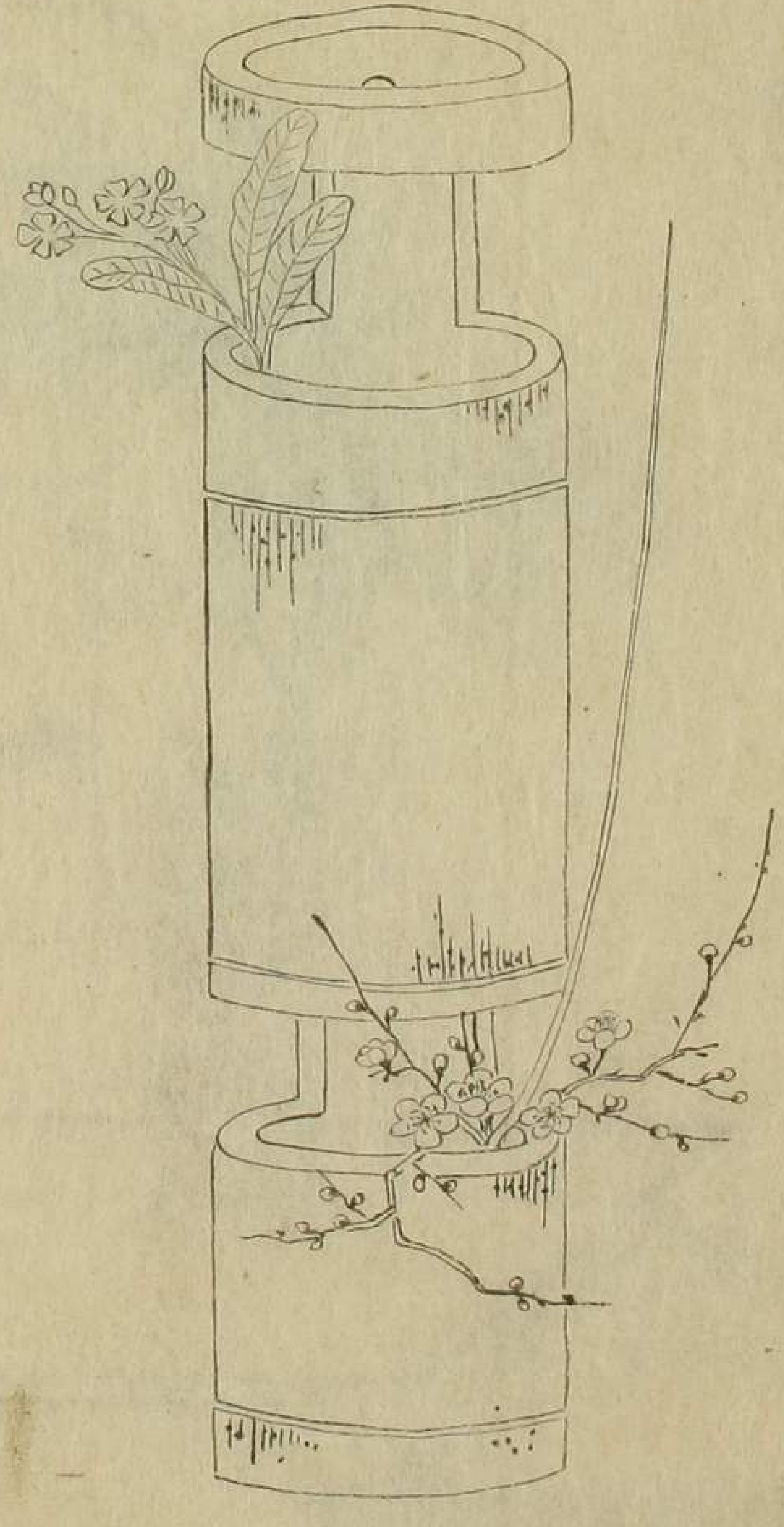
蔓(ツル)物之事口傳アリ

結柳　獅子口ニ傳アリ

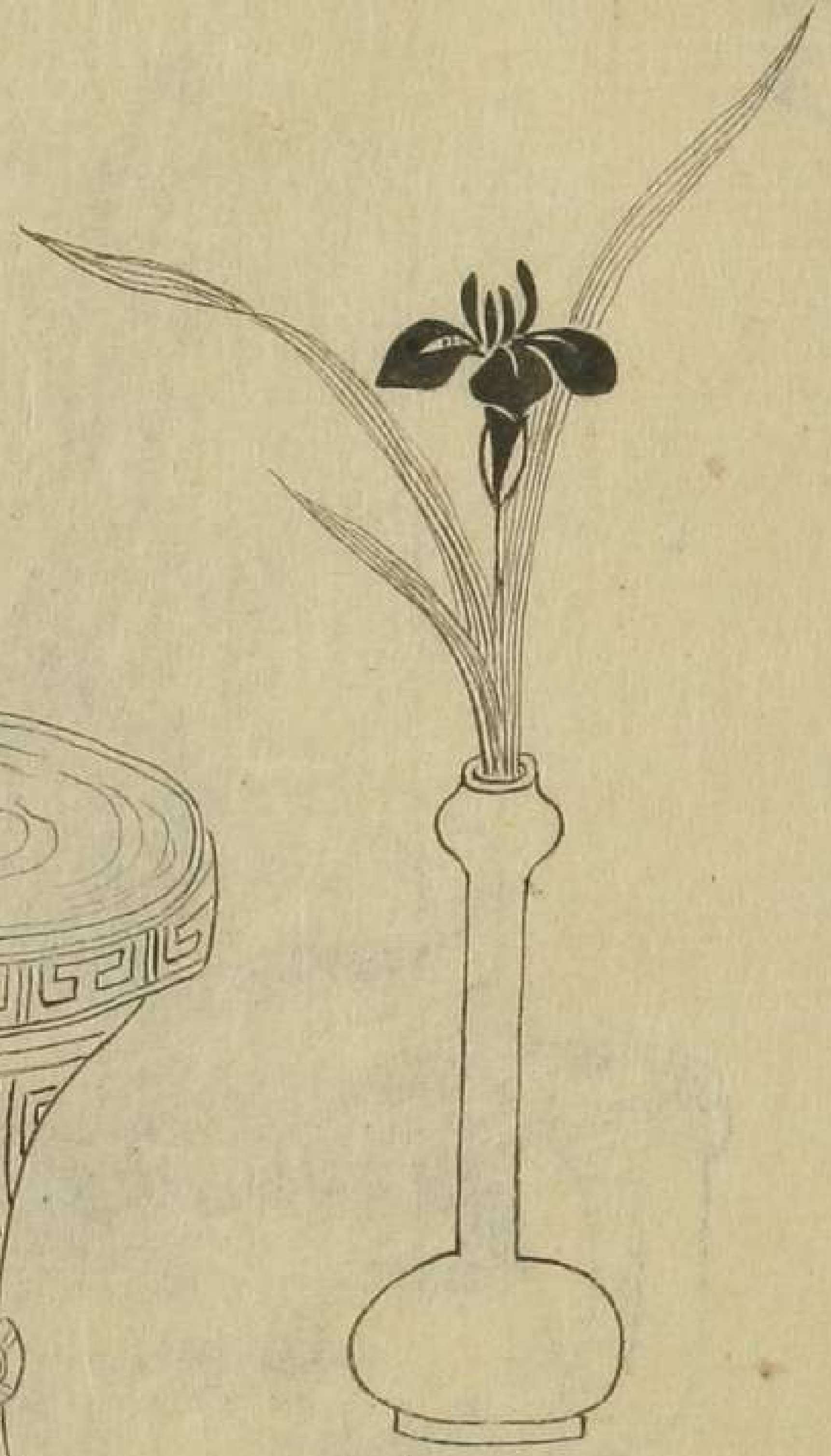


一輪牡丹　傳

二重切上ニ草下ニ木　傳アリ



一花ノ燕子花（カキツハタ）



一燕子花水際（キハ）ノ一葉　各傳

河骨(コウホネ)沈(シヅ)ミ花

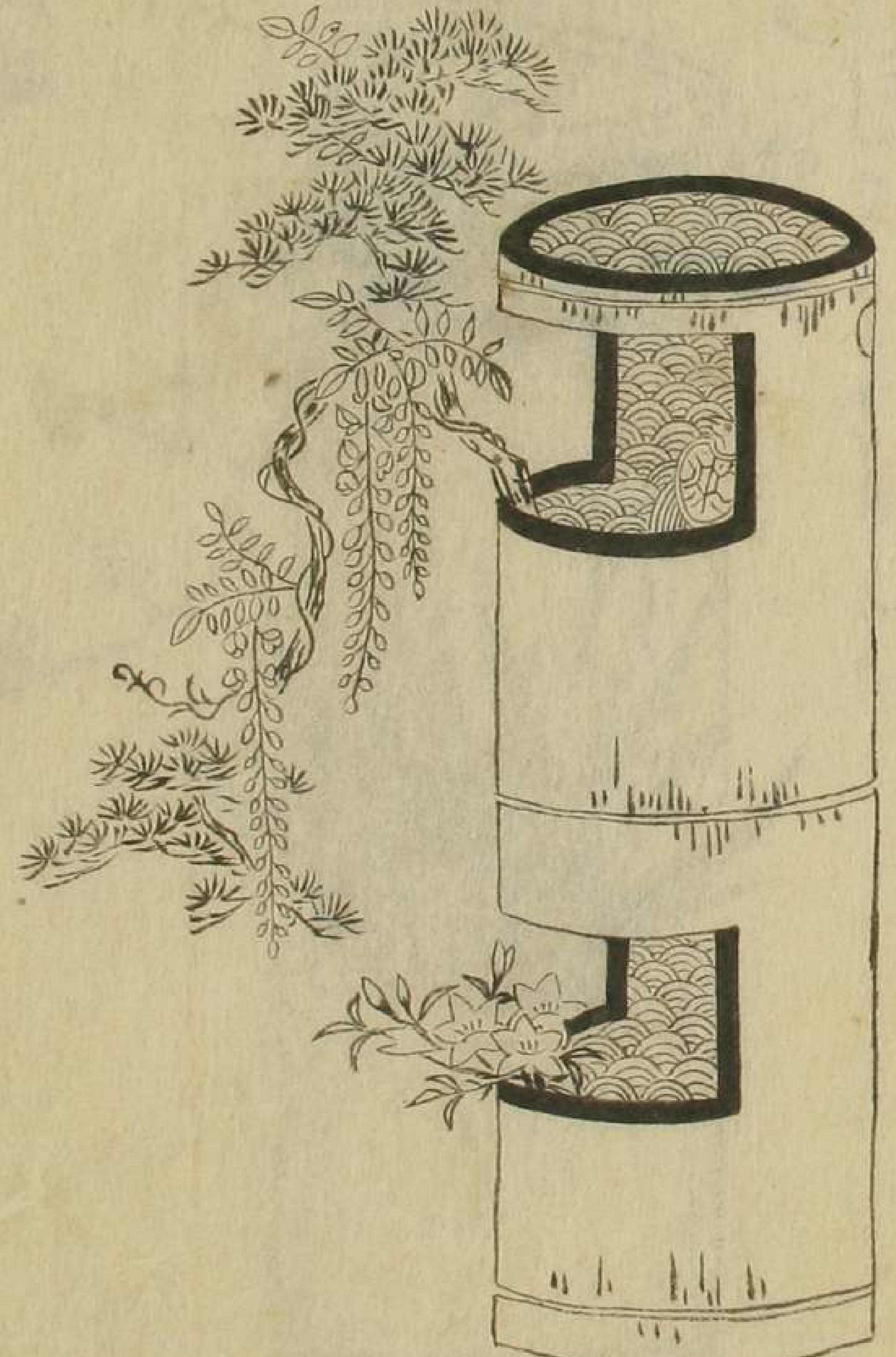
傳

苅萱(カルカヤ)ニ雁足(カンソク)

カルカヤ本名燕麦(エンバク)

竹傳

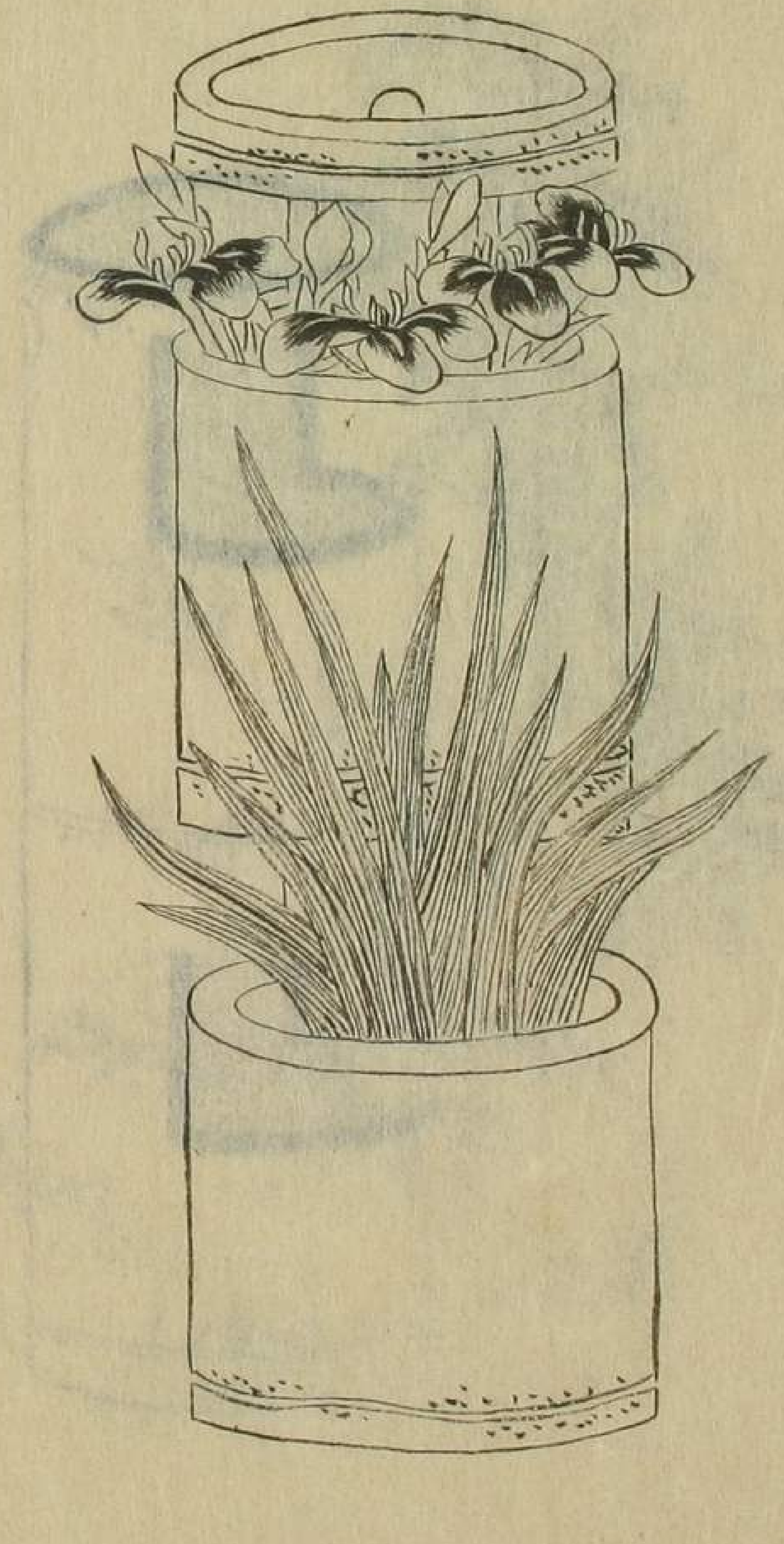
登龜花生（ノホリカメ）



松　藤　躑躅（ツヽジ）　事ハ口授（シユ）アリ

千宗佐 覚々斎

二重切燕子花作意

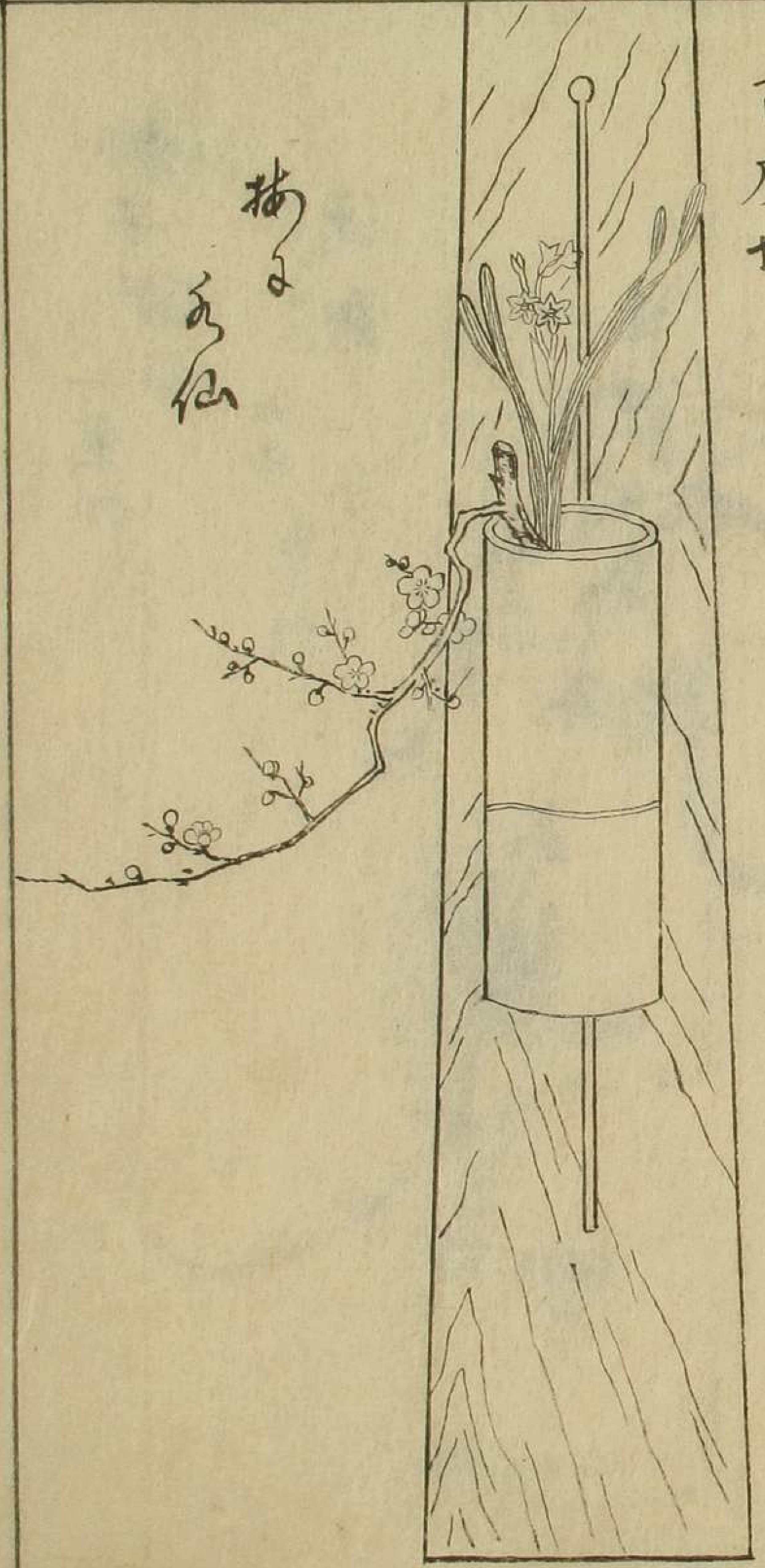


挿花千筋の麓　後巻之下

挿方(イケカタ)圖式

此巻にあらはせる所の生る図式ところのもの茶花筒の
名ある其茶人好子のあやまり毒草を加へし花をとる人
のこゝろ得をしめしけり

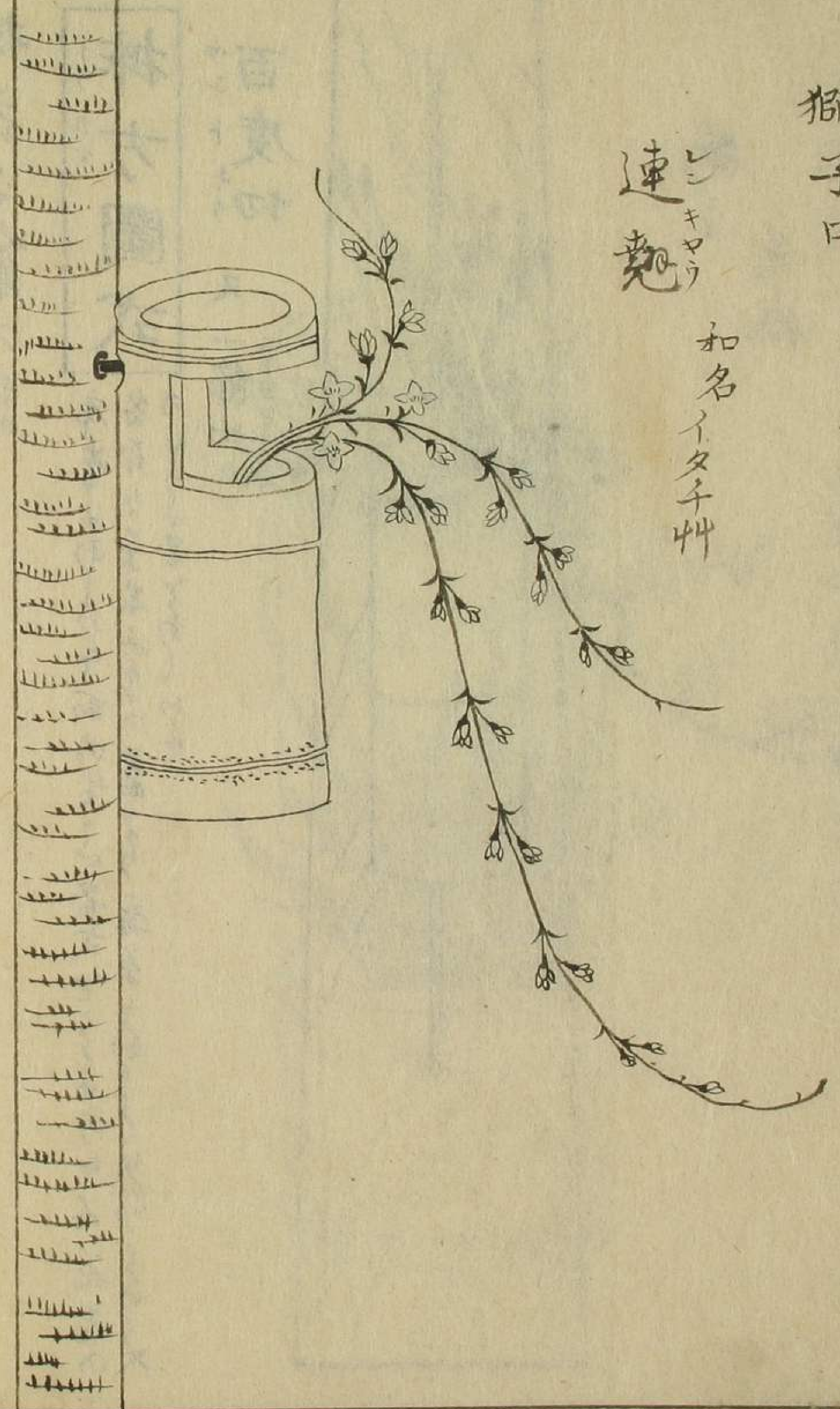
百度切(ツントキリ)　又一節切(ヒトヨキリ)



獅子口　一重切

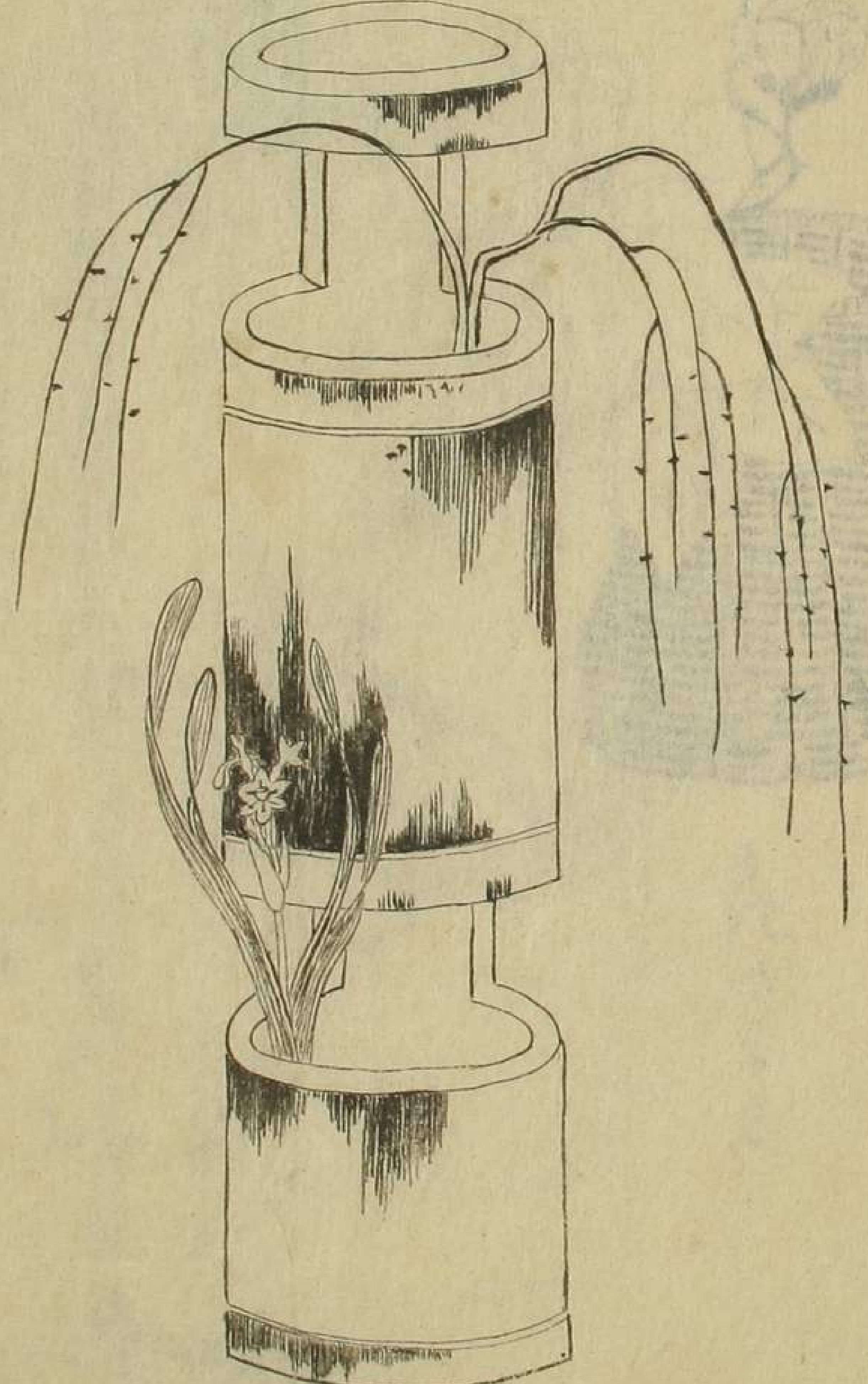
連翹（レンギヤウ）

和名イタチ艸

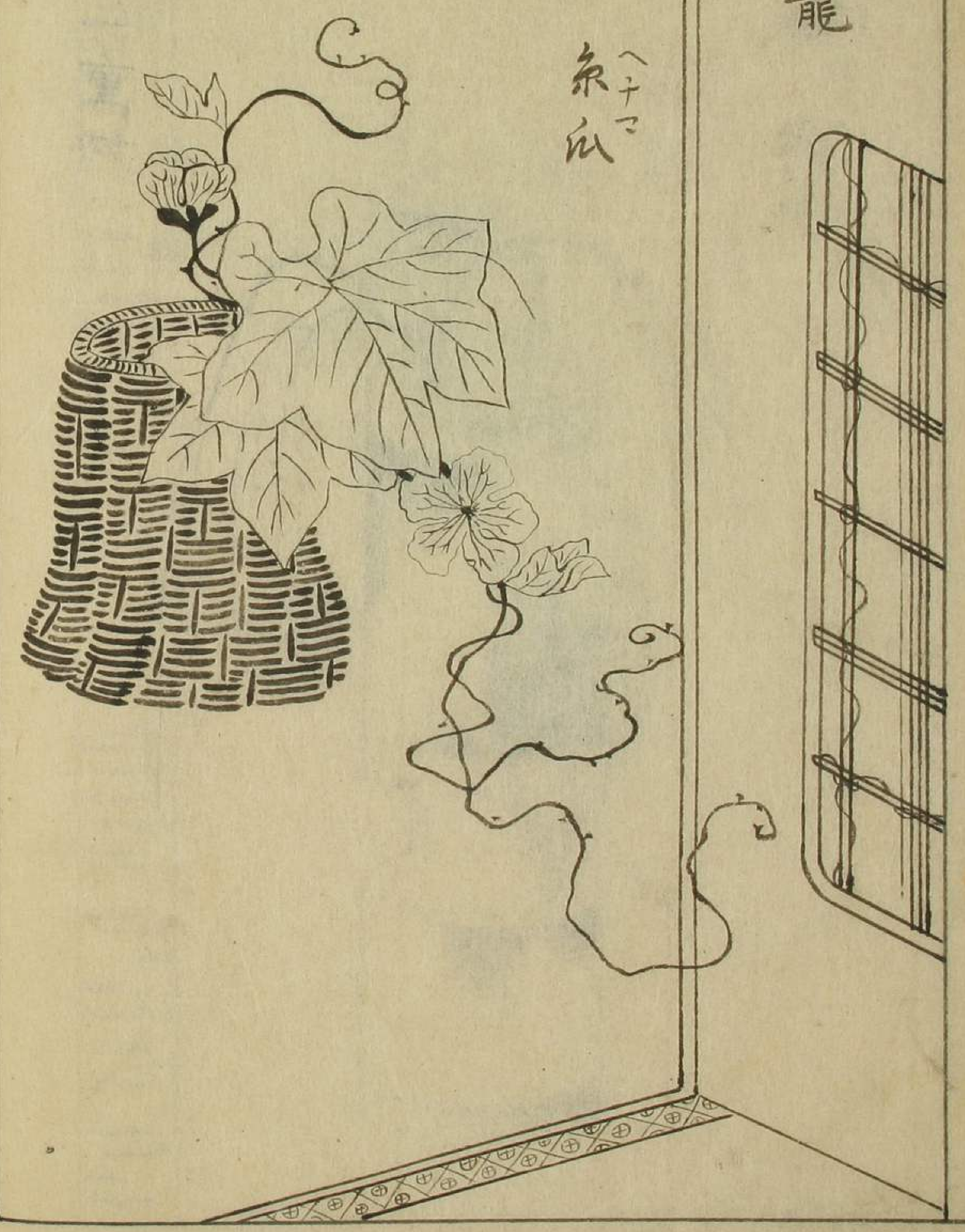


二重切

柳　水仙

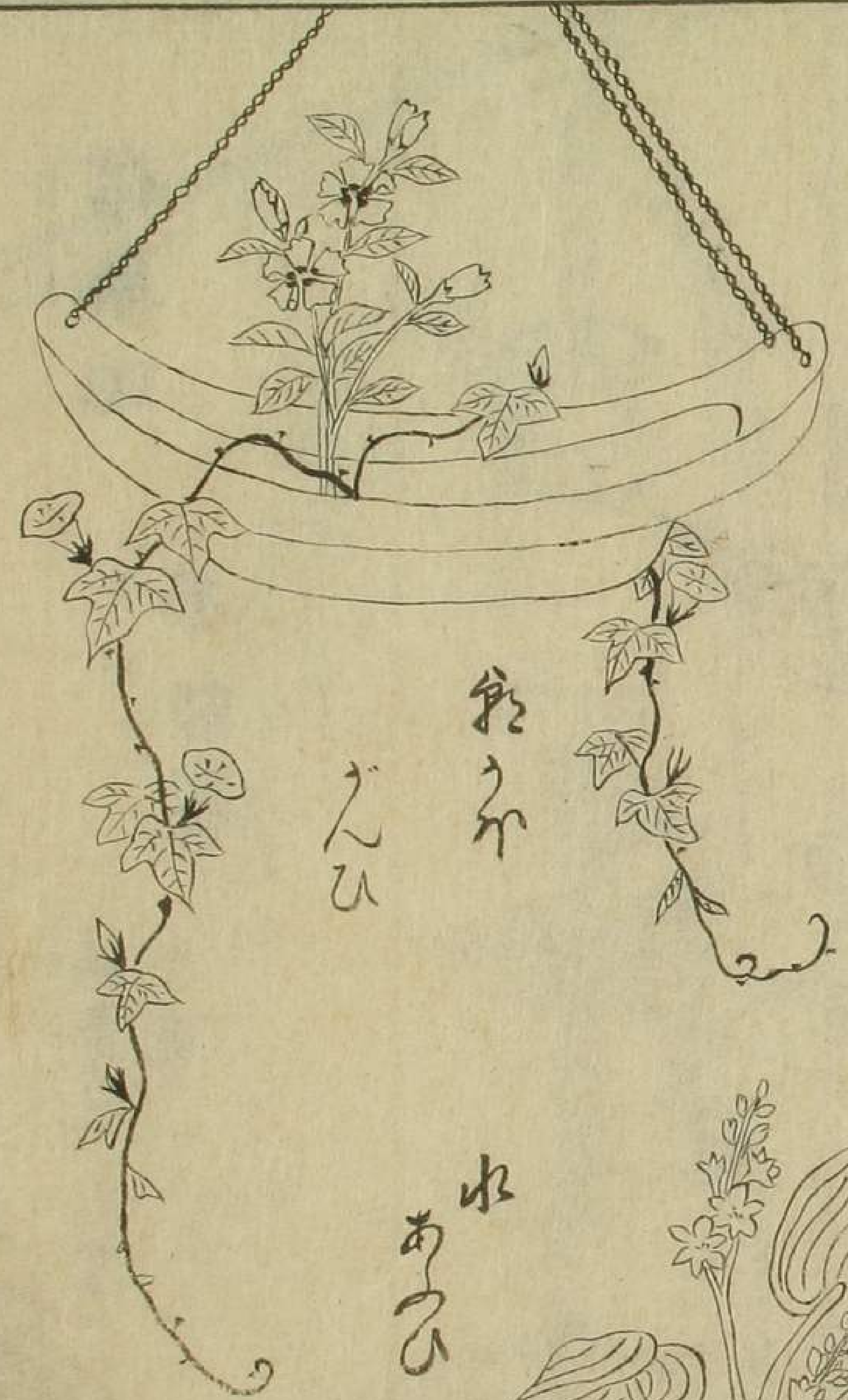


籠



道安切　又楼切（ヤクラ）

入船
上坐
下坐
出船
水仙


泊船
又カヽリ舟モ

置船
水あふひ

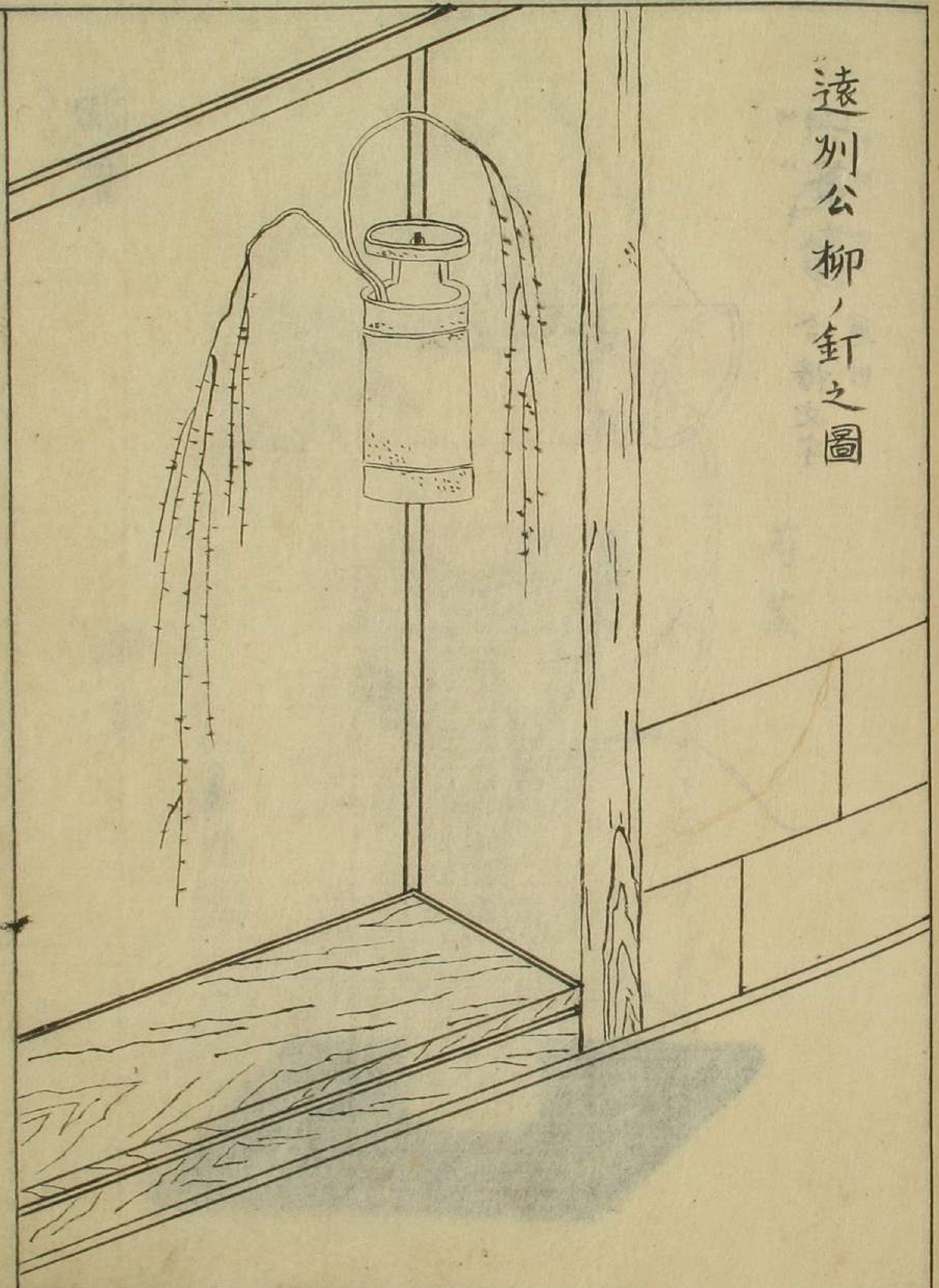
信樂(シガラキ)磁

茶梅花(サンシクハ)

山茶花(サヽンクワ)ノ文字ツバキナリ
今通テサヽンクハトヨフ

矢筈ウス板圖

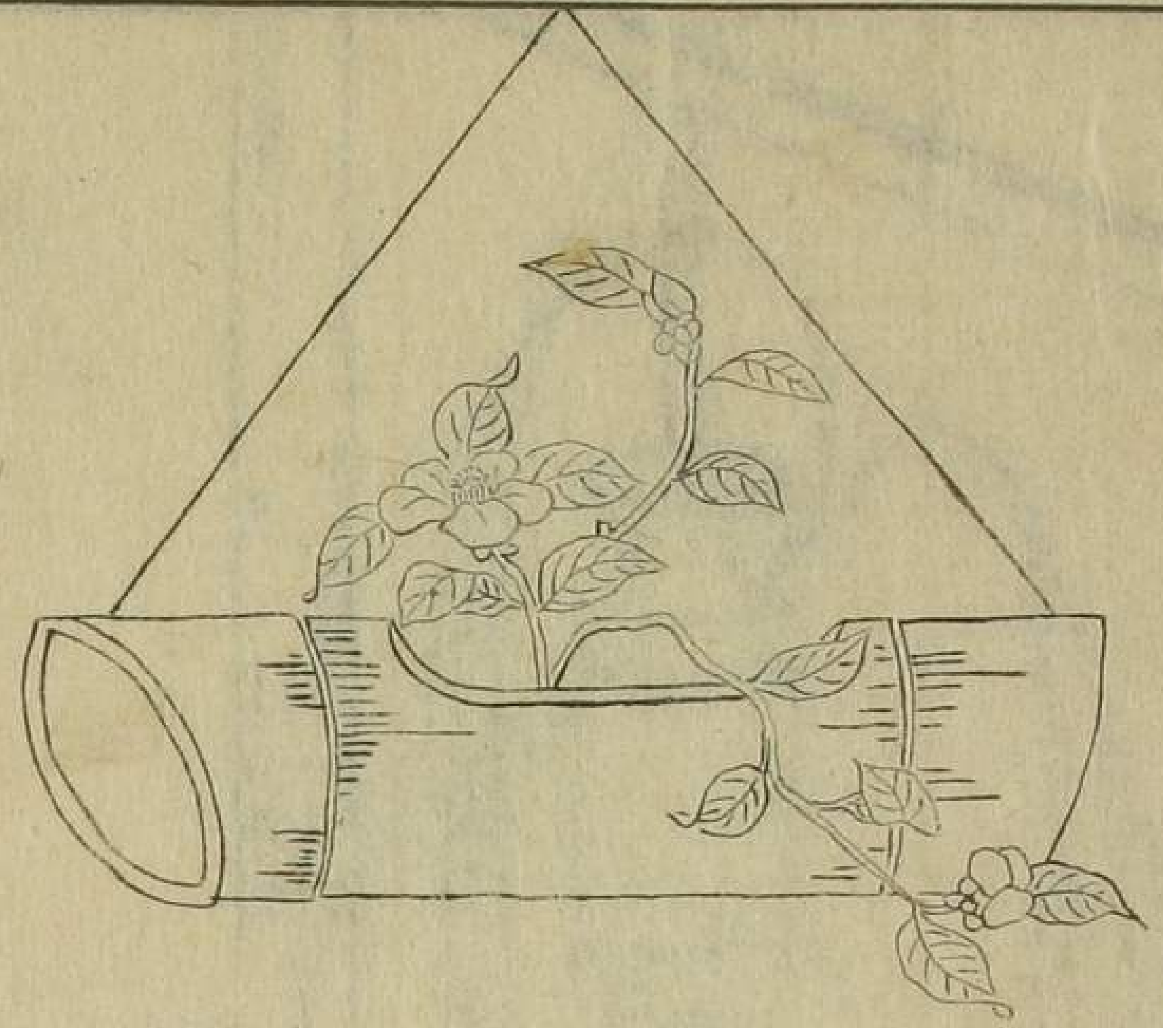
遠州公柳ノ釘之圖



油筒(アブラツヽ)

山茶花(ツバキ)

今椿文字通用

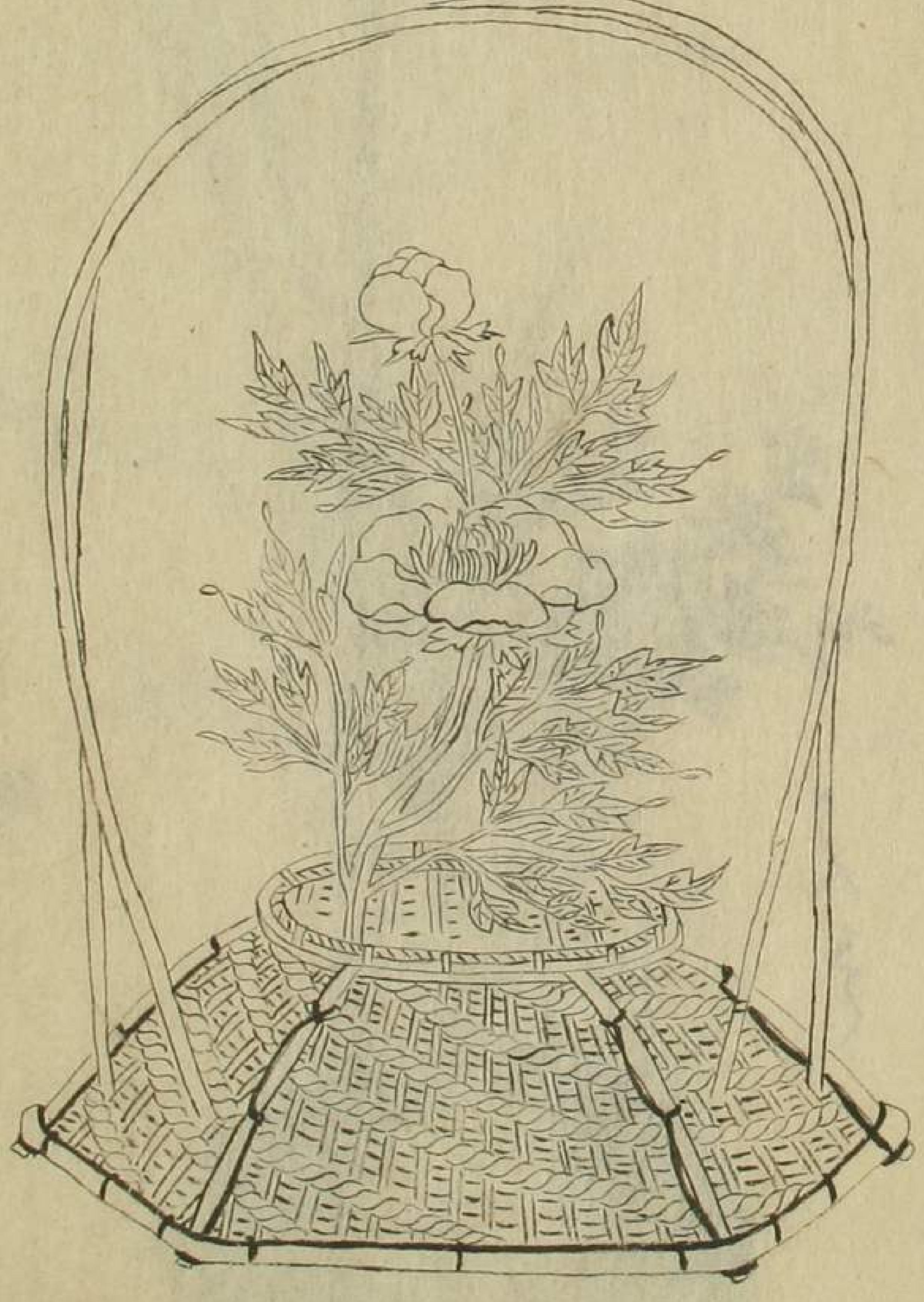


鶴首(ツルクビ)

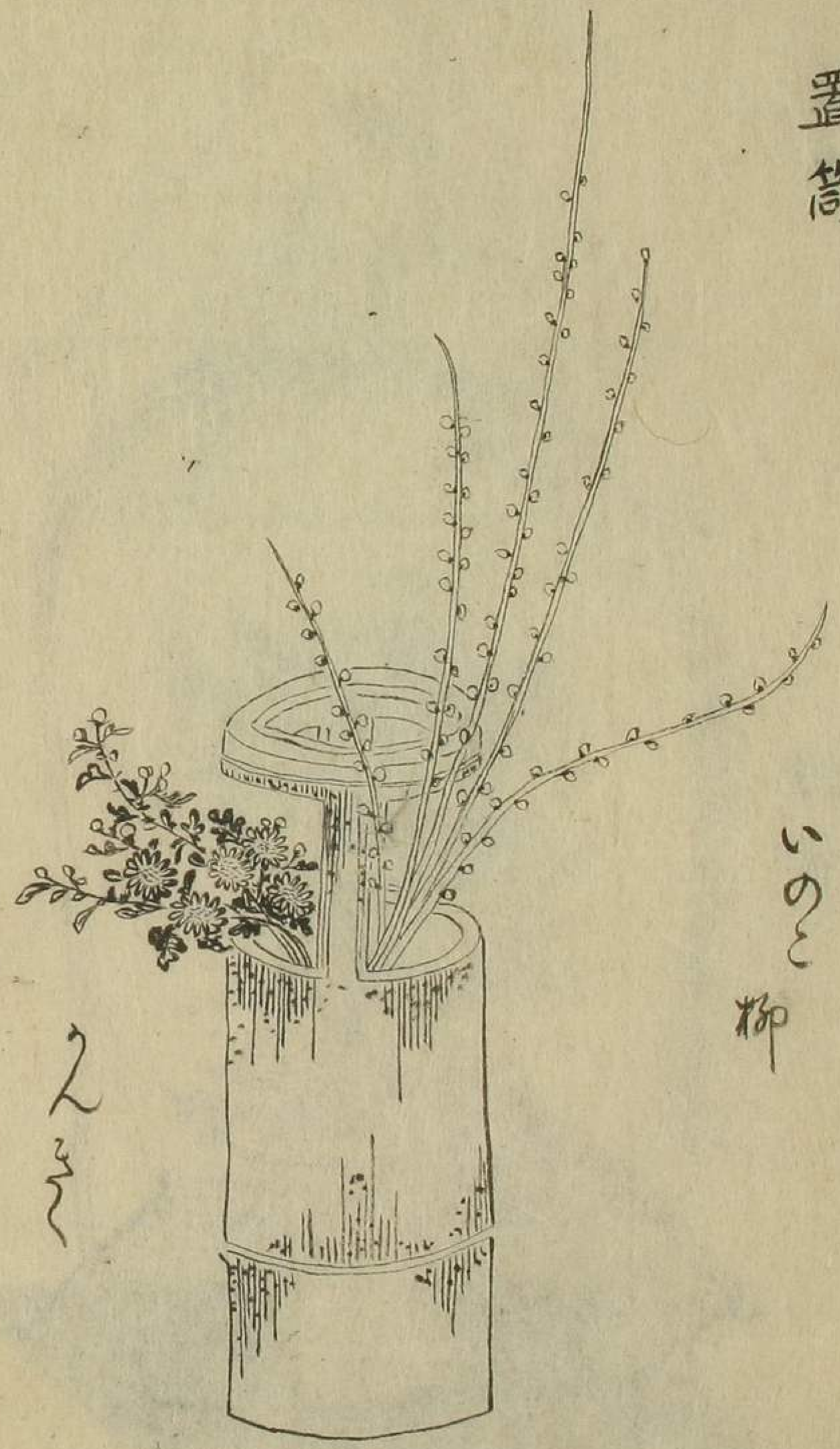
麦の花

宗全篭(ソウゼンカゴ)

芍薬



置筒(オキヅツ) 横



唐銅(カラカネ)置花生

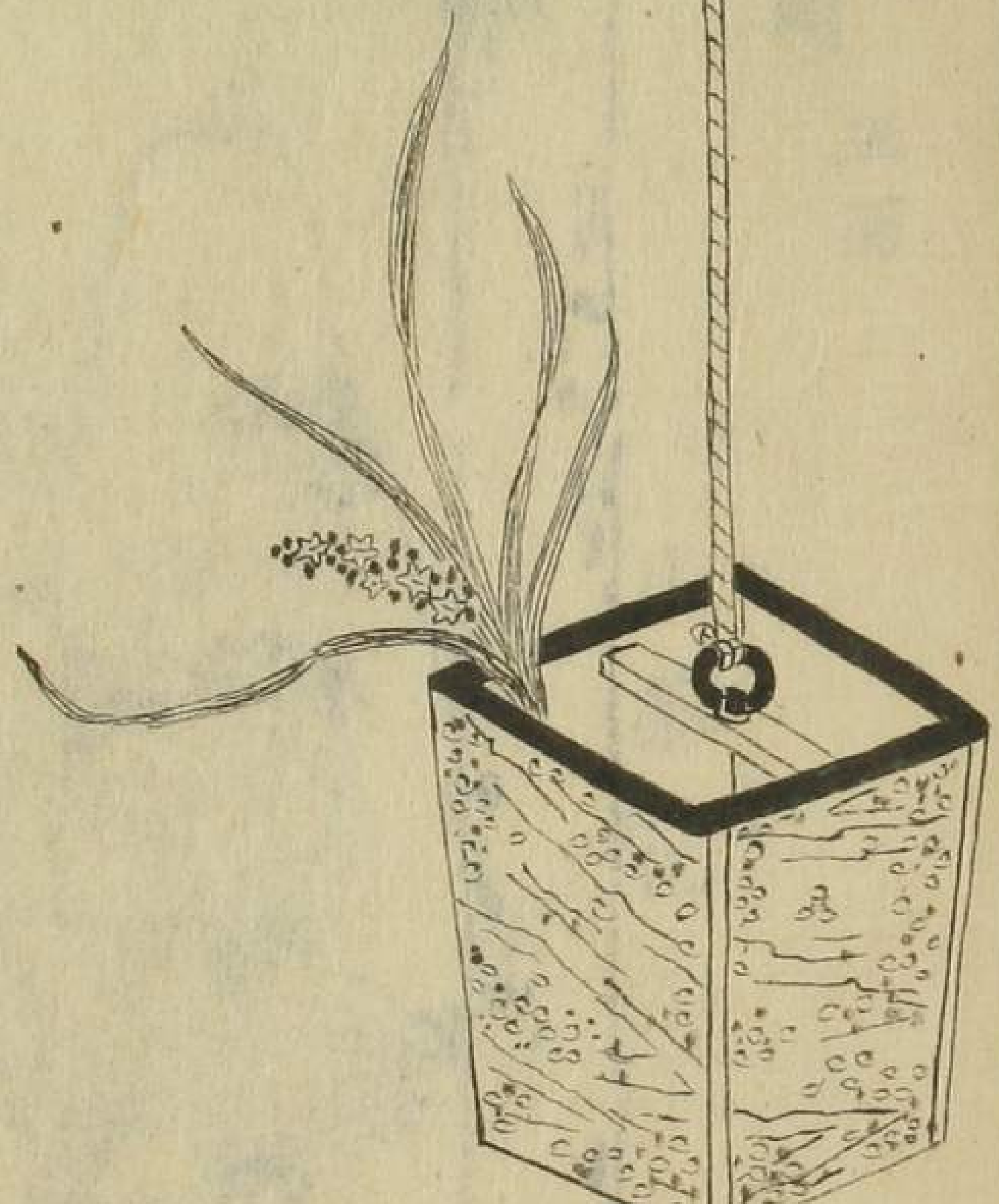
杜若(ヤブメウカ)、花メウ

世ニ燕子花(カキツハタ)ノ文字ニ用来ルヿ久可改

同

黍（キビ）ニ鼓子花（ヒルガヲ）

釣瓶

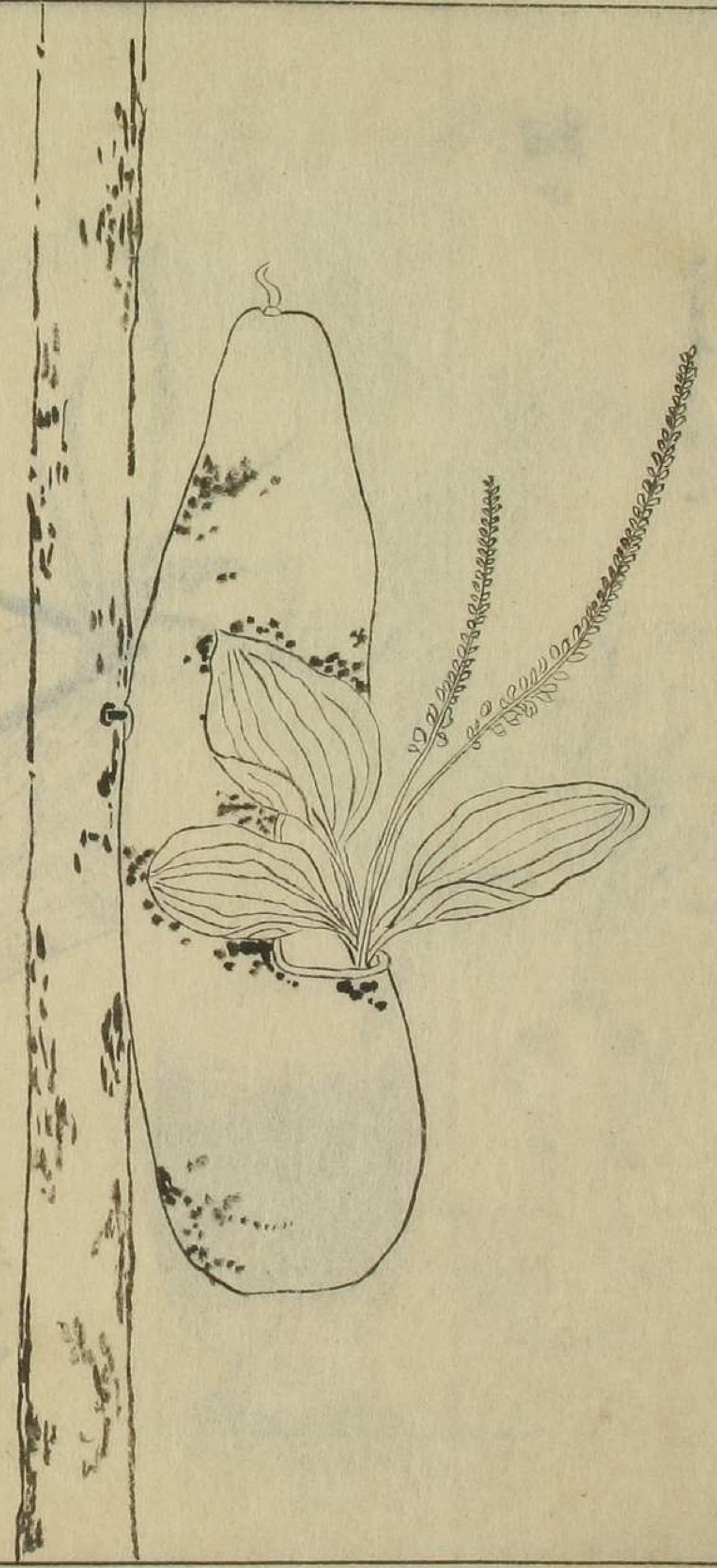


吉祥草
又観音艸

細口

なでしこ

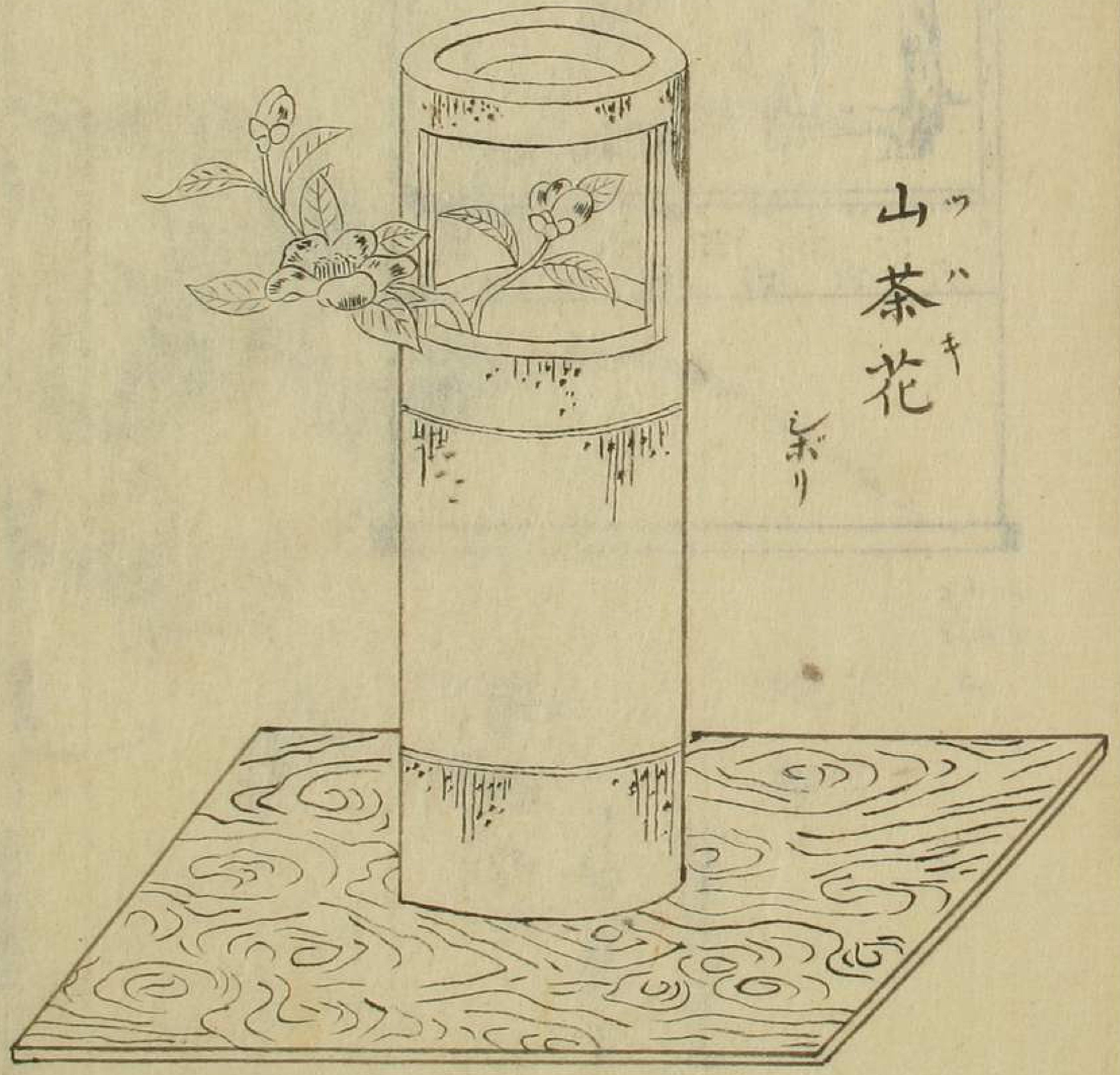
夕顔(ユウカホ)花生



野甜菜(ヲバコ)

置筒

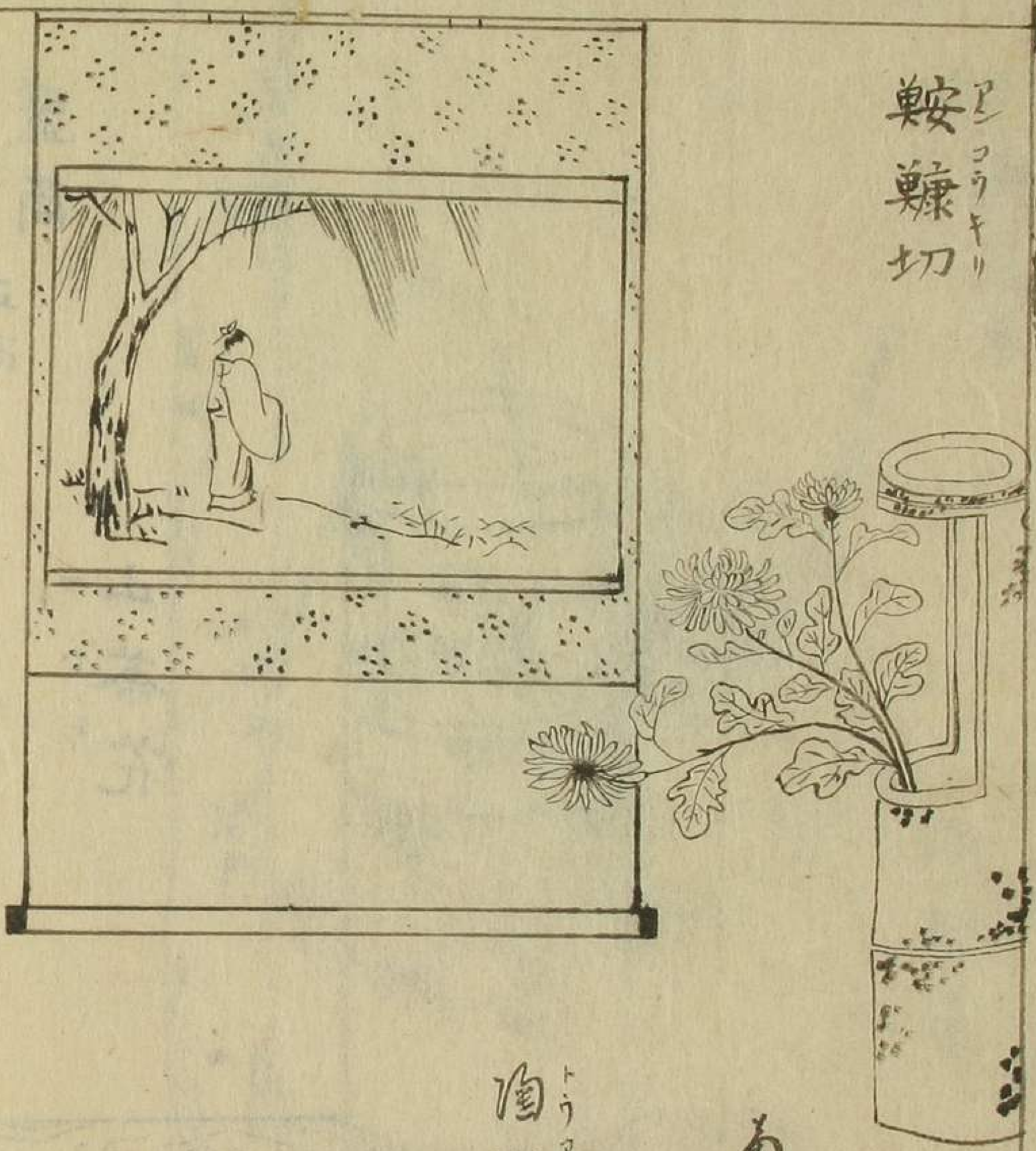
正面



山茶花(ツハキ)

しぼり

鞍韉切（アンコウキリ）

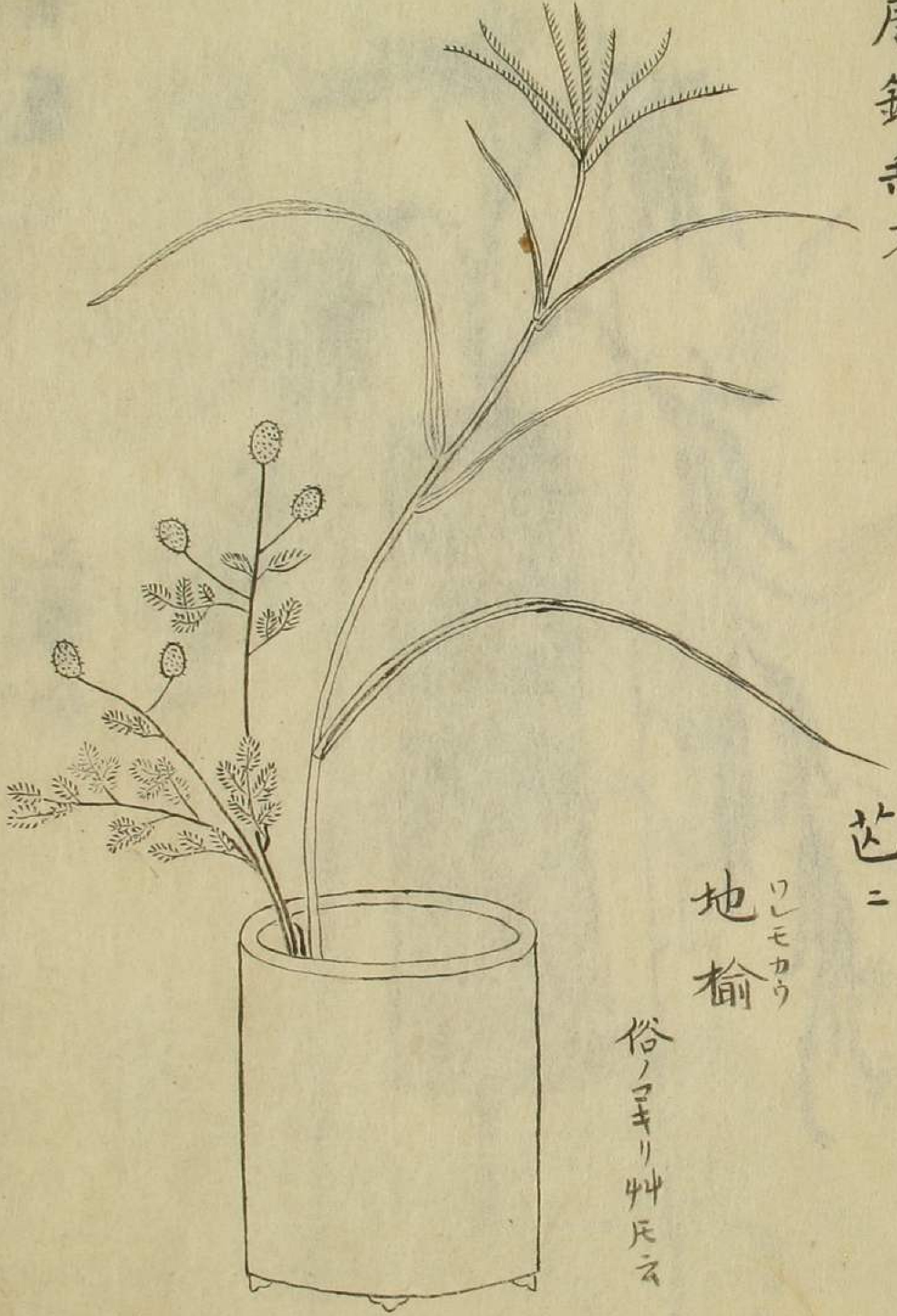


菊

陶淵明（トウヱンメイ）のかけもの

わらん

唐銅無文

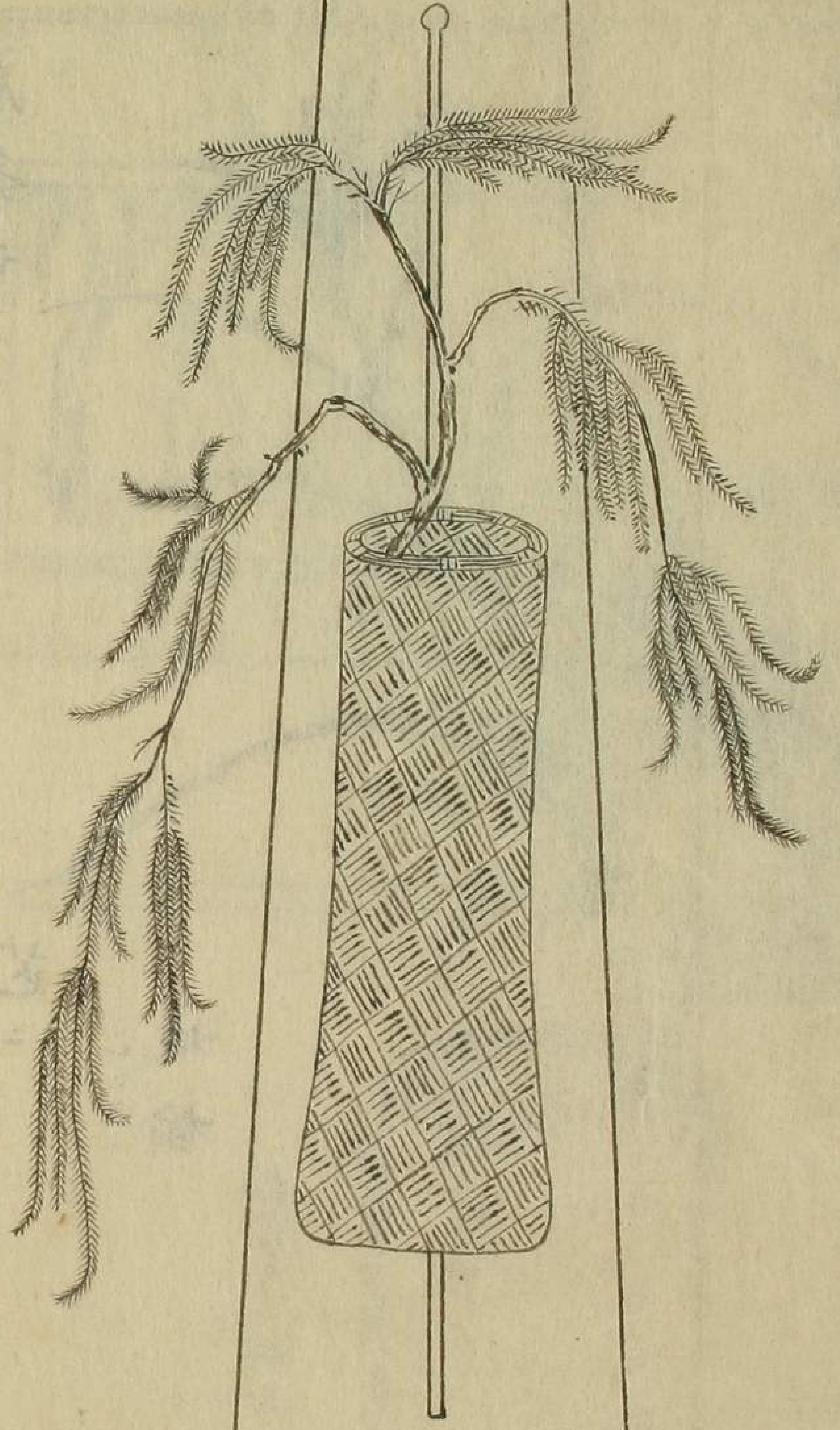


芒（スヽキ）ニ

地楡（ワレモカウ）

俗ノコギリ艸ト云

掛籠



三春柳（ギヨりウ）

銅細口

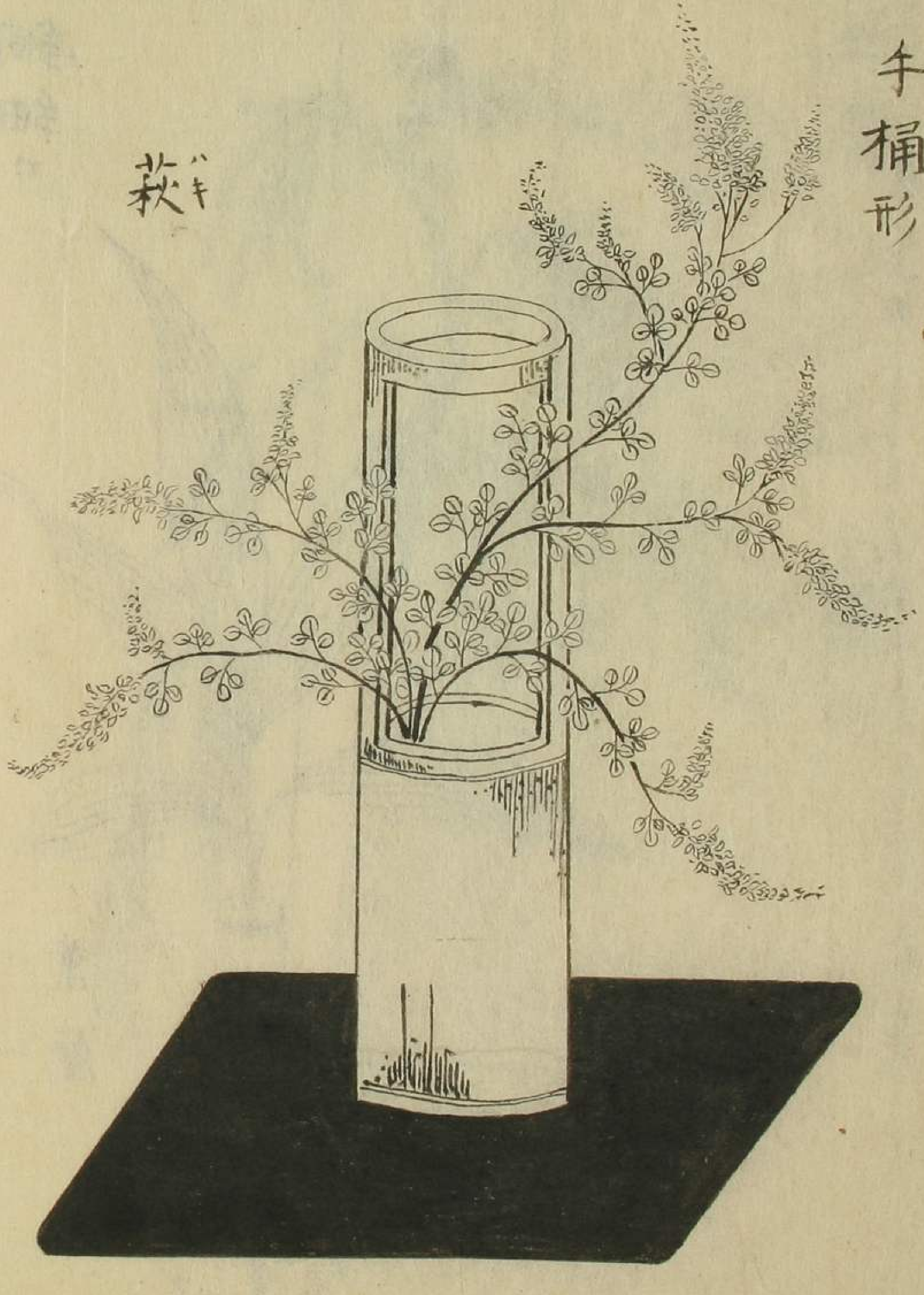
葉蘭（ハラン）

獅子口

麗春花（ビジンソウ）

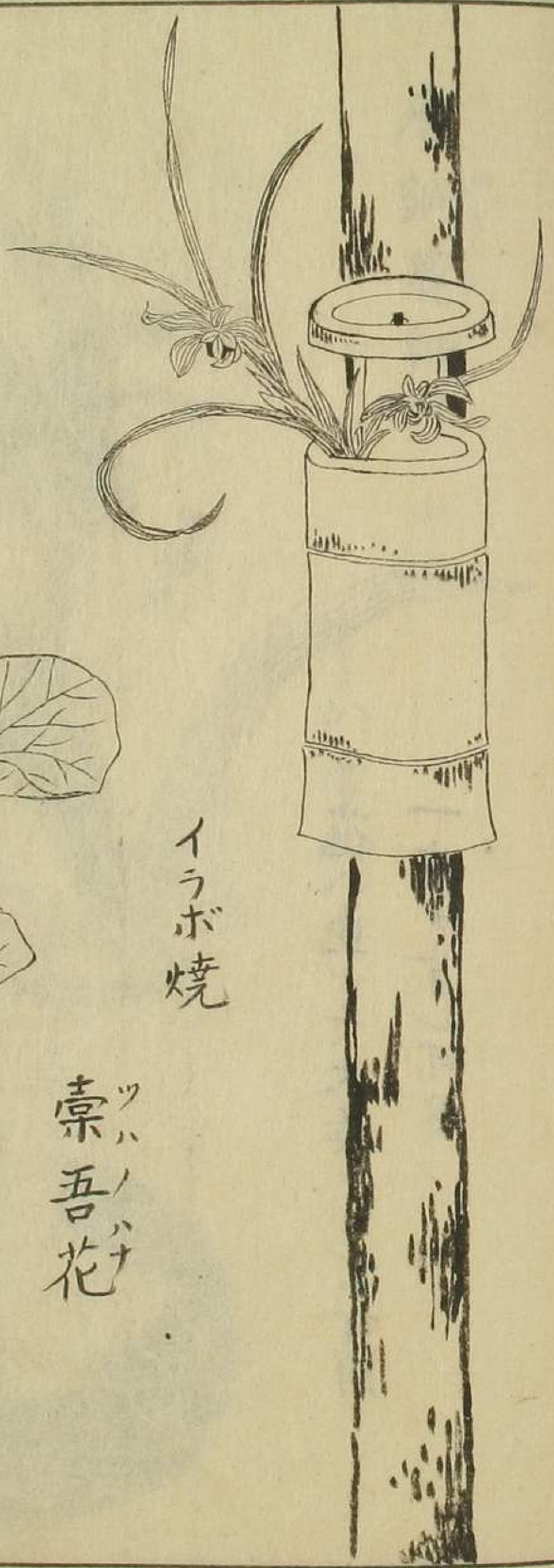
手桶形

萩（ハギ）



獅子口

報春先（シユンラン）



イラボ焼

槖吾花（ツハノハナ）

一節切（ヒトヨキリ）

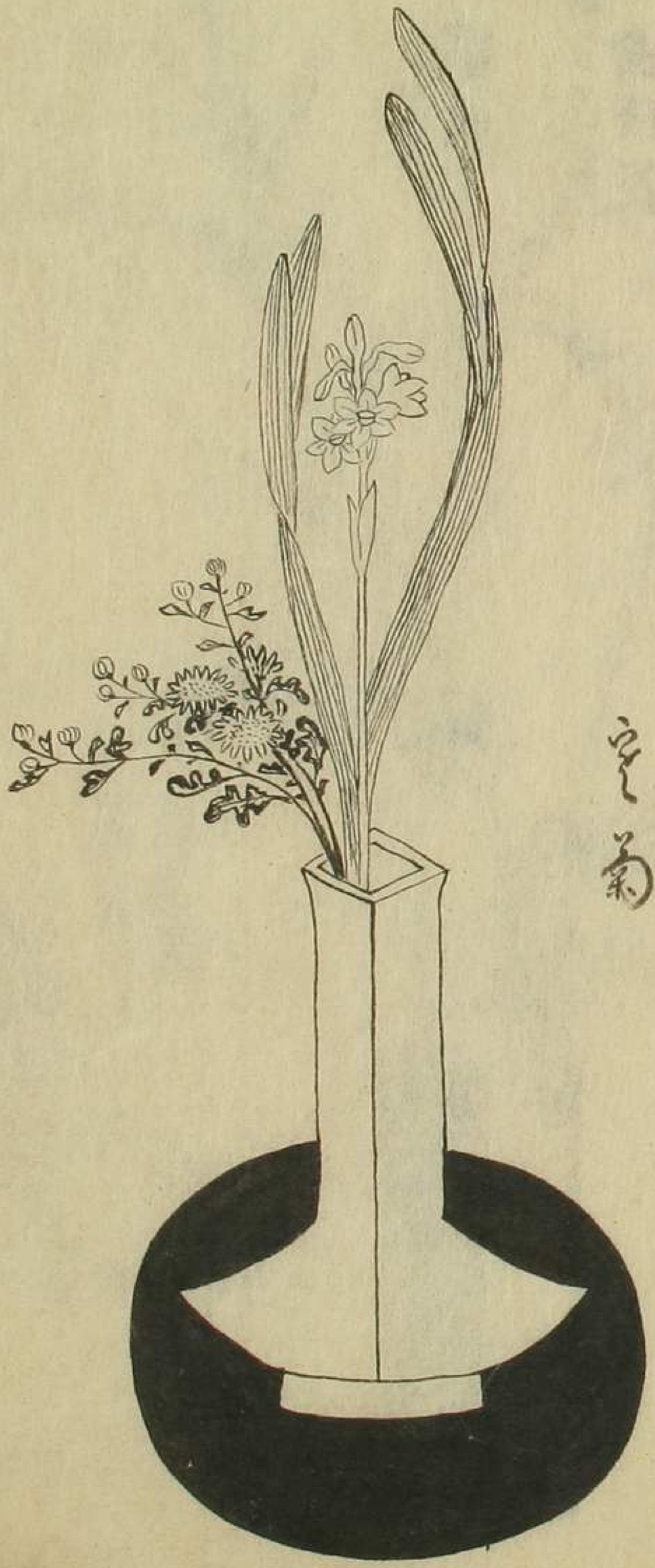
萱草（クハンソウ）

ワスレグサト云

花八重ナルハ大毒アリ不可用

一重ナルヨシ可用

唐銅菱（カ子ヒシ）細口



すいせん

しら菊

川蜀葵

一名金銭花

午時ニ花開子時ニ落故午子花トモ云毒アリ不可用

金盞花

一名長春菊

四季ニ花アリ毒ナシ

經筒形

雀麥

スヽメムギ

マコトノカルカヤハ是也

仙翁花

置籠

棣棠花（ヤマブキ）

挿花

千筋之麓

附録之巻

一 立居家居を兼たる花挿やうの事
一 化生の図式
一 奥口伝の訣文
一 人に花を送りやう并草木包やう
一 花道諸事寸法
一 四季花こしらへ同行へやうの秘事

生花千筋の麓附録

附言

東都 入江玉蟾撰

早稲田大学図書

一此一巻ハ我流にしく伝ふるところを集て一ト花を翫へ
いたすことを要として不對し新く書述ぬ世上流布ニかなふ
ことを家にさ留しおけとも一つの流を翫がたしきの一くちより行く書
のこそるおのゝ文伝のうそうしさんと見えなり
一書のなかの秘を口伝の訣文なりや伝授ケ条をといへるも
名目と図式とわかりしく事ハいうまても趣意を亡師
の手に授るの日指ひたる詞ありよりて師命を尊るの

謂なり伝切を重じ師恩を思ふ人に伝ふを惜しむ
べからんこと伝家を慈せしむは佞といふ事に似たりされ
一業とする人は之をしらずといふ人に花を数寄る人も花を知て
花を知らざる人と云べし手練未熟の人にまよひの花とよ
くする人あり是を謙の花と知りたる人は風雅なる人なる
云べし花席にしく必ず代を識るべからず坐配志門のふしく
酒興とする人のともがらを
一代流に古人の形に叶はぬ形勢多し是師の伝を
わすれたるは識るまじきれを代門に對して穿鑿を
べからず吾門に家門にしくまじきものなりへし

○主居客居を兼たる花挿様
一お客の座と節賞者のうちへ亭主より出されて出ざる
と紀に客居の出口へ花をいけ主居の方へ長く枝茎を
出すべし此挿やう
連花の流中へ
礼を述る也へ
客居の出口へ花を生
又脇もの方へ枝葉多く
出すに亭主のもてなしへ
禮なり圖を見ても弁へし

主居勝手ノ方

客居上坐ノ方

作意圖式

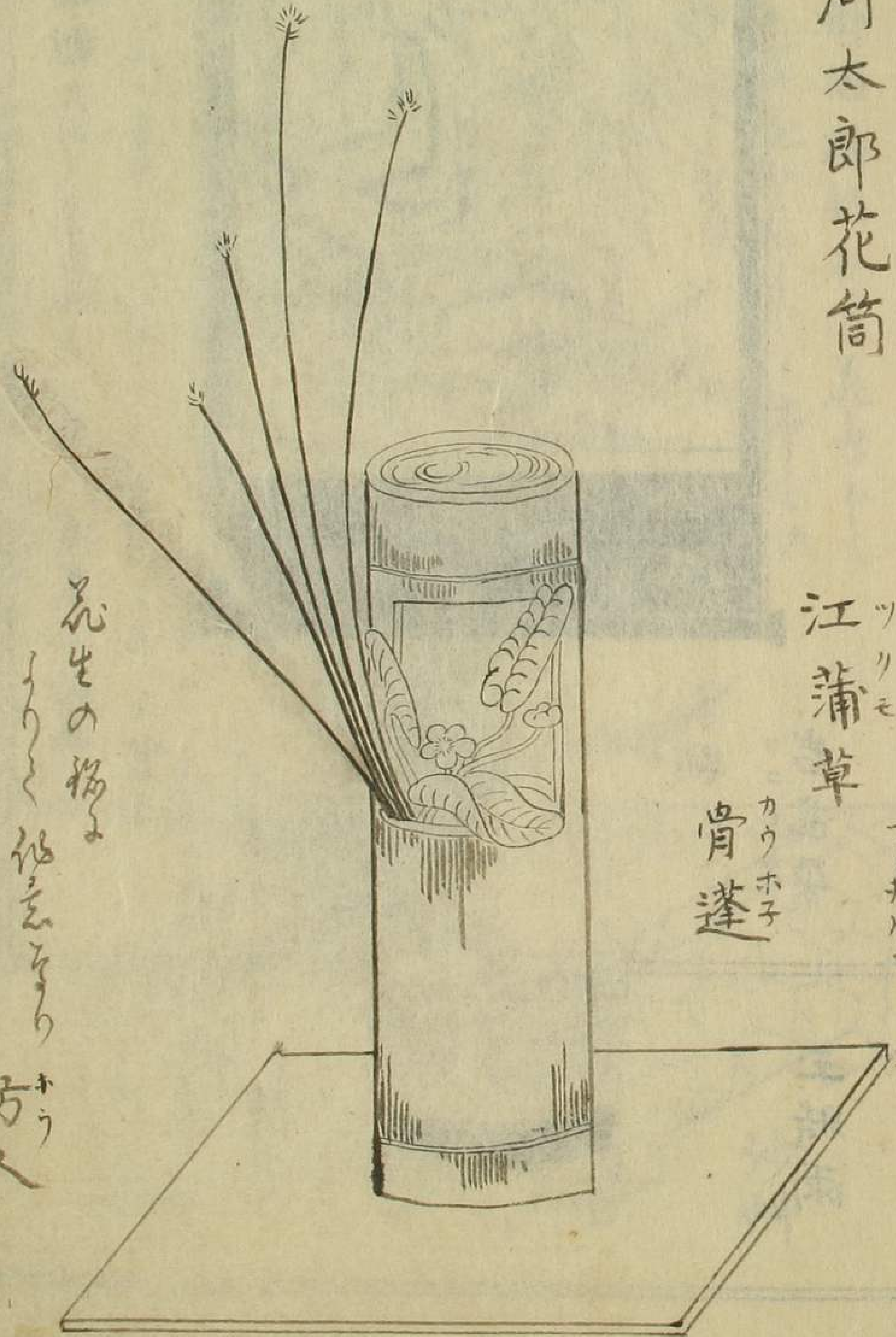
走船（ハシリ）

知風草（チフウソウ）挿さく

又よ 知風草を いけたる 似さく

醉（スイ）花齊

河太郎花筒



江蒲草（ツリモ）

骨蓬（カウホネ） フト井ト云

花生の形よりく似えそり

防人（ホウ）

掛物大かたなる画を唐絵の器に牡丹と
一もとに書たるは画に花そへたる器に
あしらいなれば
けふしう
体之

掛物極彩色の花鳥なり
さるは花の活やうも青きの
いさつなり
こんと
さとらく
あやのなり
おもしろく
生かしける
時の一具なりけり
む古人の体をも
ありし

馬柄杓に
底ぬきよ

新古今集

駒とめてなほ水かはむ
山ぶきの花の露そふ
井手の玉川

俊成卿

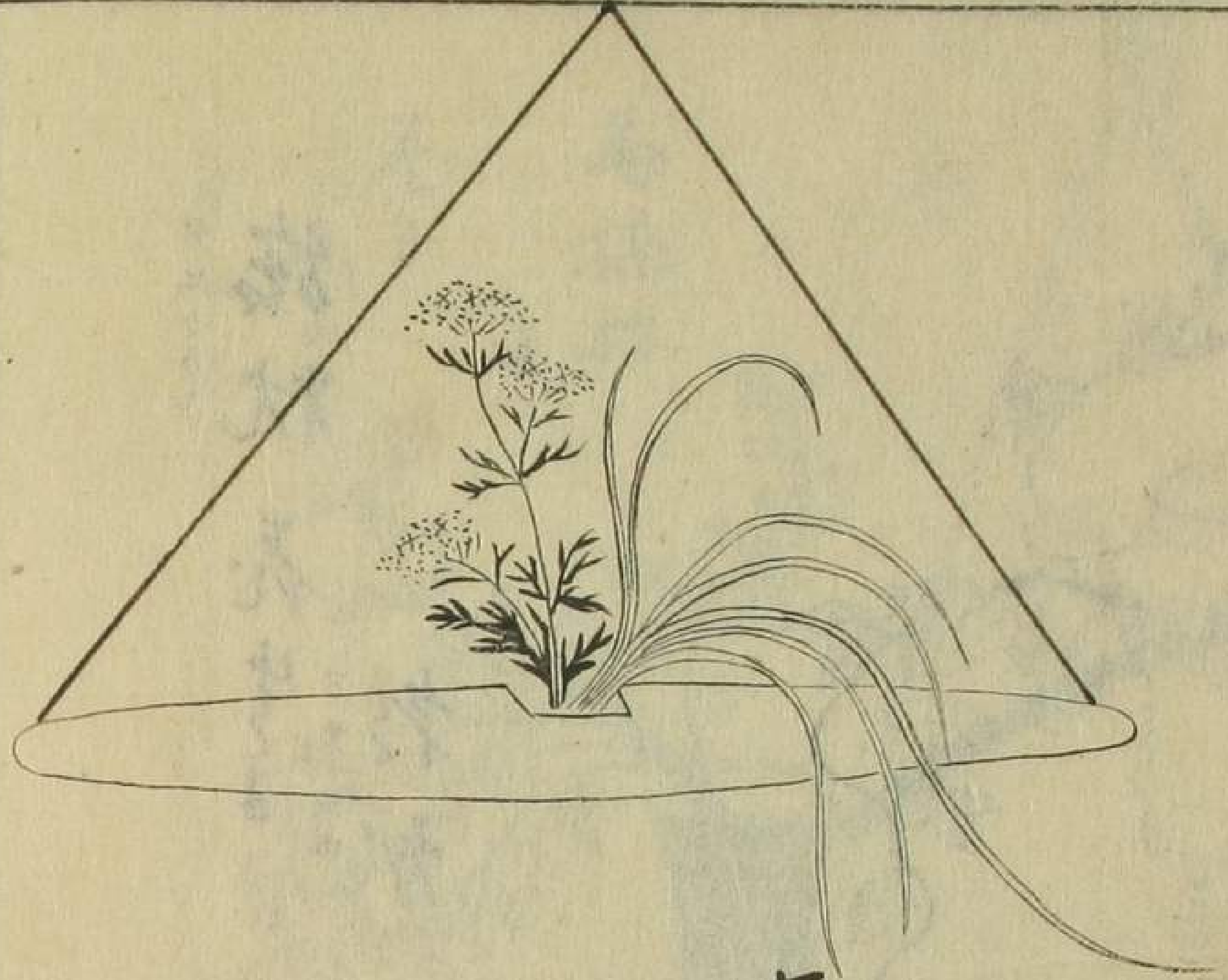
此古哥に
よりての
花をさす

防人

旅枕(タビマクラ)花生に
朝顔(アサカホ)

此花を
かくして
一入おもしろかりき

玉蟾

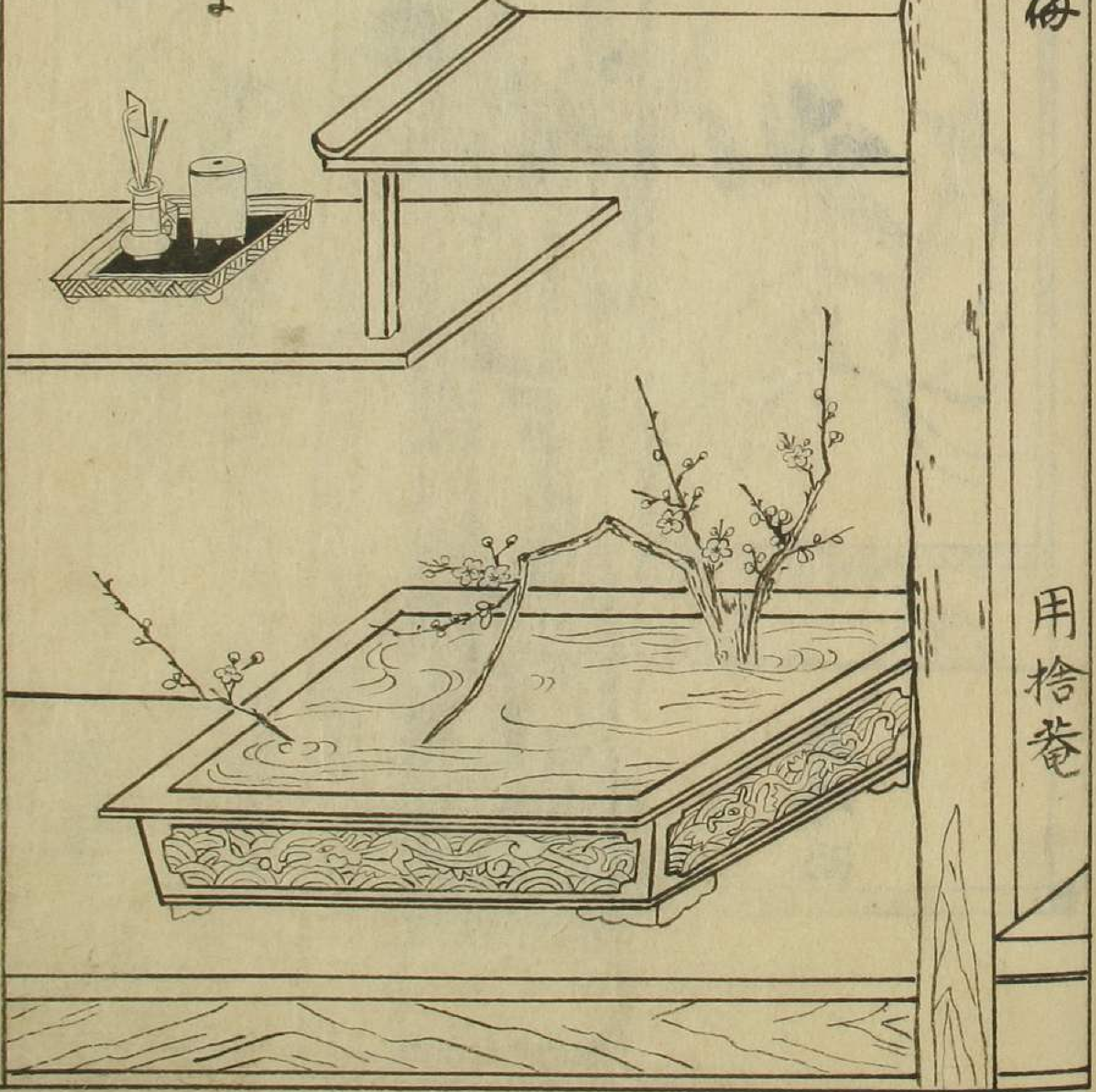


柿の絵花生に
女郎花 糸薄

七夕は
たむけく
絵をかり

水くらきの梅

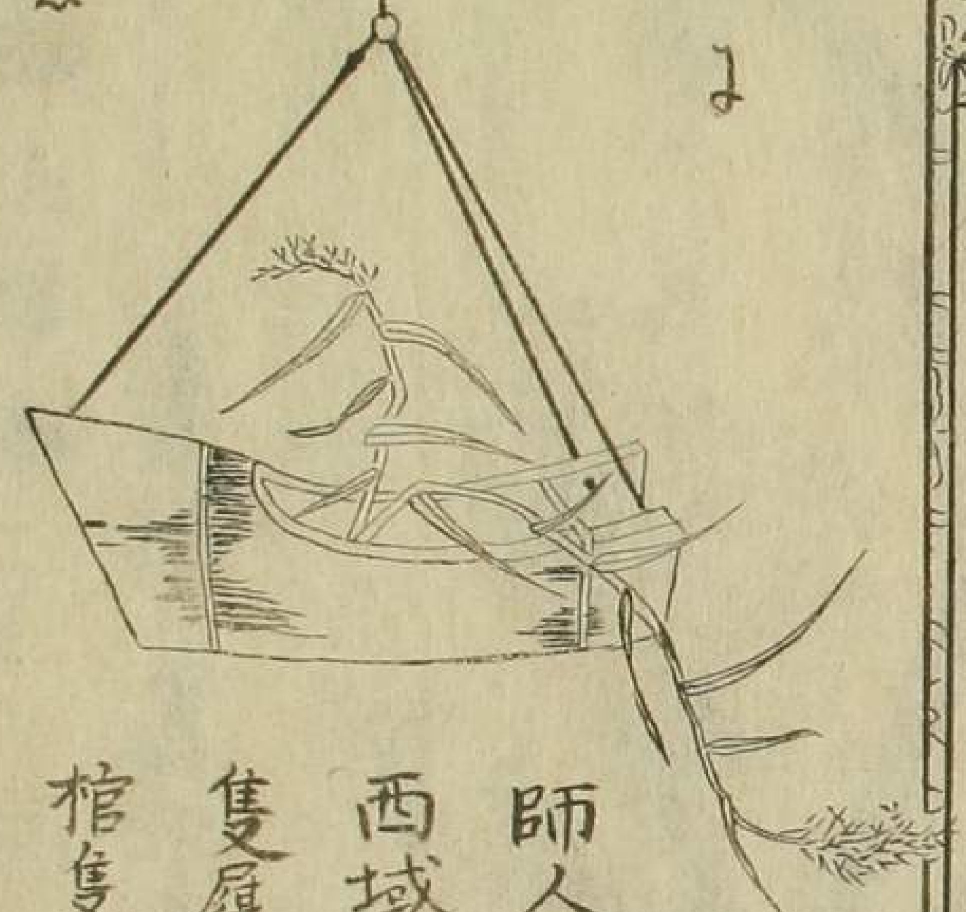
きくむきぬ
人のまく
や
みなすらん
梅の下ゆく
水の
ながれに



用捨庵

尺八の筒に
竹葉菜(ツユクサ)

玉時雨



沓舟(クツブネ)に
芦

掛物
達磨(ダルマ)

正宗賛　上畧

師人滅後葬于熊耳後宋雲使
西域還遇師於葱嶺見師手携
隻履而返帰奏帝開壙果見空
棺隻履存焉

珉雪

○水仙の葉を手にて挿る口授

一水仙は其葉の出生正しく花瓣(ヒラ)を六つに分ち陰極正しく事を
婦に数あると祝事にも専用とす是非正しく事を
書記しつてつし葉をゑ〇く生へし其葉に出生を
違へは誤に其葉は乱るゝしかしれ

○活り花と用る事

一活花とりとも時ずしさる花は出生ぬ猶なさう活り花に
緒立語のての清うけ式は病人所也の花なとも其用つる之
花時なしれといへしとも先は十月頃小寒くりのく十月の実
各と小寒とて冬至(トウシ)の候(コウ)子近く一陽来復(ツリ)の末を始くゝ

水仙三本の変化 花なき一本一体なり

沙艸

陽と陰とにありて咲くゆへに花によりて祝事にも
つかふべし

○花葉水にうかむ事

一諸花によらず夫婦ふたりなれども蓮河骨などはくるしからず
蓮は水中より開くる葉も並又河骨も同じ花水底
よりしく咲くも此二草の出生なればなり

○苅萱(カルカヤ)雁足(カンソク)の事

一枯(カレ)葉虫喰葉は捨べき事なれども十月より後
花すくなきや雁足の花なく花少なくなるのと生ずる初
冬より生ずる花殊なり時に花すくなきゆへなれども梅瓶の中に

いけし真より初冬より前には活(イケ)ことなる儀あり

○両瓶對花を忌嫌婚礼には用ゆる事

一常に生る事はならず婚姻の座敷には生る男女赤白
といふ事なり是いきての生方儀なりといへど何れにも書の
べし

○金せん花同名両種ある事

一金盞(キンセン)花は葉茎の茎に忌嫌く花性に吟味といふべし

金銭花(キンセンクワ) 本名 川蜀葵(ショクキ) 毒アリ用ヘカラス 午時ニ花発キ子時ニ落故ニ午子花ト云

金盞花(キンセンクワ) 一名 長春菊 花四季ニアリ 毒ナシ用ヘシ 花盞(サカヅキ)ノ象アリ
是人ノ知ル所ノ金センノ花ナリ

世には毒種なりと尋ね毒草なりとて生菊を嫌ふに

○燕子花(カキツハタ)の一花ハくるしからざる也　但水際の一葉に

一見にも二形なりて何もま活ける花のごとく書なれバし

うるし古人俳仙(ハイセン)柳居(リウ)居士の吟に

娘とこそ工夢へ結ぶなりうれつらき

此活を知りて工案(リアン)し活ふに水や知る水やわかるの

ならぬ所に挿して符合(フカウ)すれバ自然にかなふけしきとなりて花

（一文字水際の一葉とどまるをむ活なり

○柳子口の編物擬えて挿る也

一　編とぬるく生るる梅柳或ハ伸(ノヒ)やかなる梅に生ゆ

なすかれと知らるし編を挿して生る時ハ柳子口と

称(セウ)せらるゝと心得へし

○結び柳の事

一　此生方ハ変じて送別(サウヘツ)の花にして張喬が詩の結柳

様なり同じく御活く活るし又石州君柳を結び

活ひしるハ彼柳にありて或ハ紀柳一枝深紙にあり

に詩を長うしと君思ふ活ふに抜紙の一枝生方花の

例にならぬやうしとは工夫なり一切の編を挿くさ活を

さし入活ひしにいまハもとしく柳枝一筋書きを挿らし

と深紙の梅されハ然れとかひとさ河うし活ひなけ活けし

なし此中へは傍の家のむきひ柳ハ一節よしく縮亭よ
りの事後くふよりてハ書載せるものなり
○実の類を生るものゝ花に
一世に葡萄天を生るといへともしまるゝ古人の形かして立花
家よりせらるものと思ひる実の類ふかく生くる若し
りしさるものなる
梅𣕊(モドキ) 二種 花柄のなかく用ゆく茶室ふも許し生るく 古人藪柑子(ヤブコウジ)せん事なりて橘
花も常磐(トキハ)なる物ふして花咲く時候(ジコウ)かなく実のよ
とゆくゆきを正月の錺(カザリ)ふも用花ふかく無ふ在し
○一重切と柳子口と云ハ千家ふ限りなる

一重切と柳子口と云古実ハ利休翁ちる時三井寺の
山中を遊行の時水辺ふ河竹の際なるを見て興
しく生けされるいとれなり事ハいまた此時なり
柳子口の名義(ヨコ)さるよつく河骨を生ち活けりしよりれハ
他流ふしく柳子口といふいちぬ名なり利休も花ち
茶ハ一重切とよすへらまてなり一重切も利休始く
おかれかく切太閤へ献(ケン)せられしく園城寺(ヲンジヤウジ)の名ありと令
なる高家(カヲ)家の秘蔵なり
○葉のなる物花なり茶をよの葉ならのなる
一花萬花草艸をのく嫁ふ在る事なる中ふ曼珠(マンシユ)沙(サケ)花と

夏水仙も若葉の二葉ハ冬花なき時葉ニ生じける物也

夏水仙　本名　金燈艸　葉ハ正月ニ生じ出て四月枯　花ハ七月咲く　花さく時葉ハなし

曼珠沙花　一名　石蒜　葉九月ニ出て翌年四月ニかるゝ　花秋の彼岸　花ばかり抽出て咲く時葉ハなし

此ふたつ花をいける時必ず彼の葉を添へ入るべし　外葉ハ葉なきものなり

生るべし

◯杜の花の事

一杜の花遠州流にては紫ばかりを用ゐ　他流ハ紫ハもとより白と黄

ハ杜若色を用ひぬ所も見花の外なり　生形を植ゑに

對しく口傳ありて是人切の出来ぬ事となりて之花を

繼くいけるべし

◯二重切に草花生ける事

一是ハさして伝わり書ありけれどもかうして　其上水仙様と云

合せ生けられたのつるし水仙を伸く様にちゞむ本ハ縮て

草の伸びの為に右の傳と同じ　世上のとをり合せ多く屈

伸の理をとらへぬる人稀なり

◯二重切生け方の古實

一石州家　和泉草巻ノ二三曰　花の事ハとも載せて

二重切の筒に花入るゝに上の重繕くるや下の重くるや

と利休五人の弟子衆問　利休回けせんとく縁にたりけるを之

今日どのくらゐ定む事[illegible]どいふ人の弟子衆利休

ハいつく好むといへともいはれ道ハ心かとうくいふそ上の事に
入ること今日相定せるとなり
志られと利休まてハ古の例なりしを道安が生花に
くハしけれと今用る生花盛ハ端となりけるも道安ら
の事もあるべし

○卓下の花の事

一卓下の花ハ四隅の飾(アシ)にさハらしぬやうに花形ちいさく
生べし是古人のおしえなりより花器も卓下に
小さきものなり應じて生べし
此頃席の床にかざりしを卓まえにつくこてに出す

○遊芸の花に茶事と挿す事

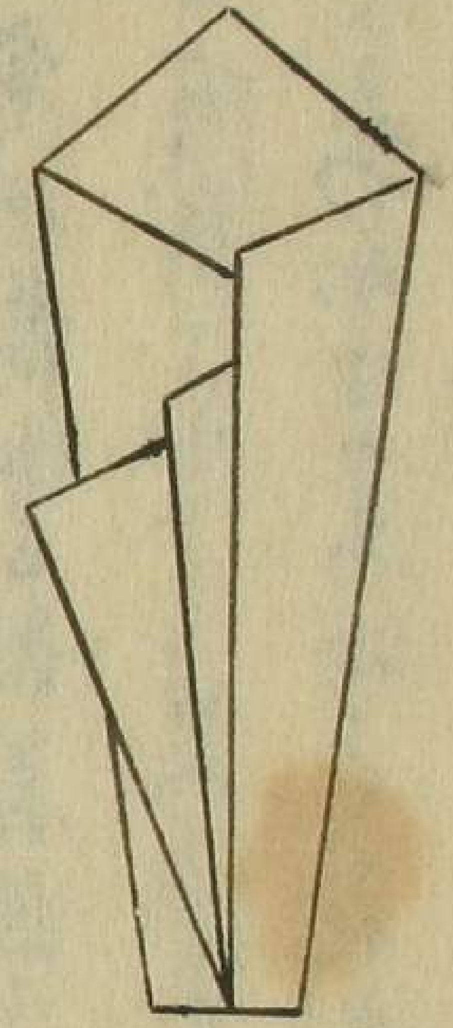
一前に花を生けるにハ時宜によりつさしくて生花一種
ハり夏の茶にしく花の能とおく生けるもの端ハり

○人へ花を遊ぶ事　和泉の茅子出るやすく

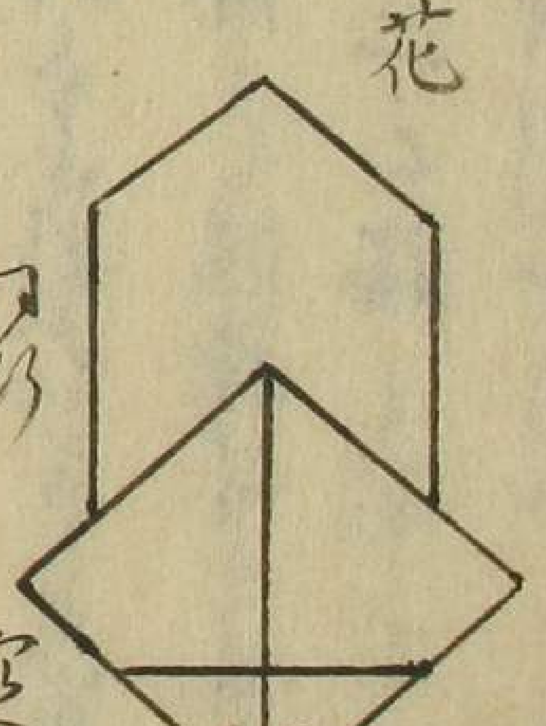
一人へ花を飾るにハ枯葉　虫喰葉　虫の巣　蜘の巣なとを
とらせ海くらし花ハくしくし紀とことるゝ生けり
ころ細実の席にある語花のちりたる語ハるハ只今とちり
とりた古花にあへし久しく謂く後飾るにあへし昔人
へ遊せるハつねのちかく花瓶二三輪も用ゐるとよへし
生實の志御挿まるへし　此例を用へし

○茶家の花包やうの図

木花

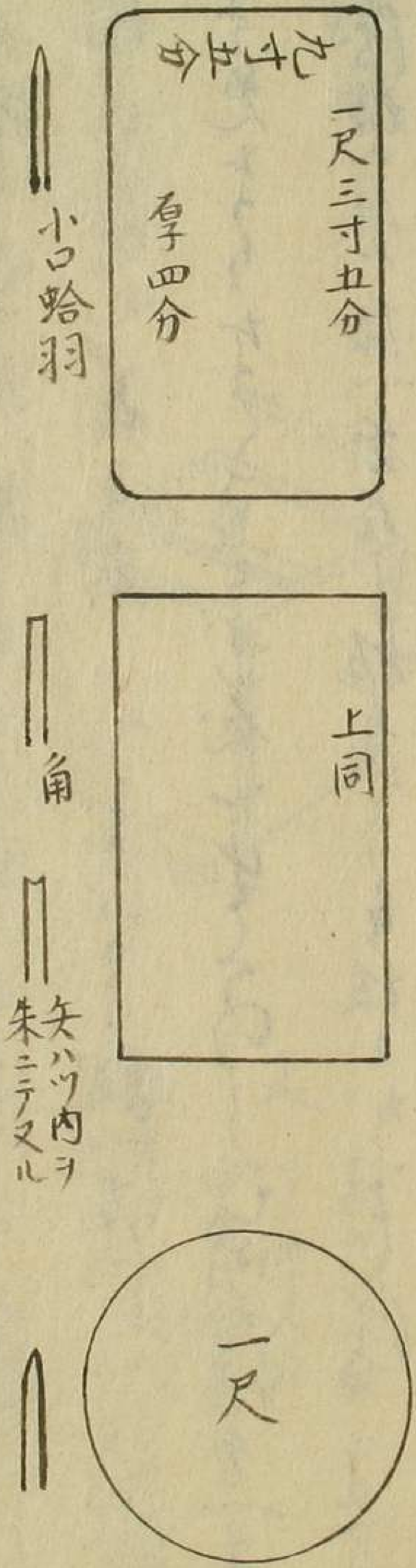


草花



○花道諸事寸法　附録の事

一重切花生ハ十家の極秘なりよつて記しかくし
も家ニ小寸法ありとの事なり
一薄板の寸法なを記すといへども古法多く撥梅等にし
て何れも一分二分ツヽの相違多し

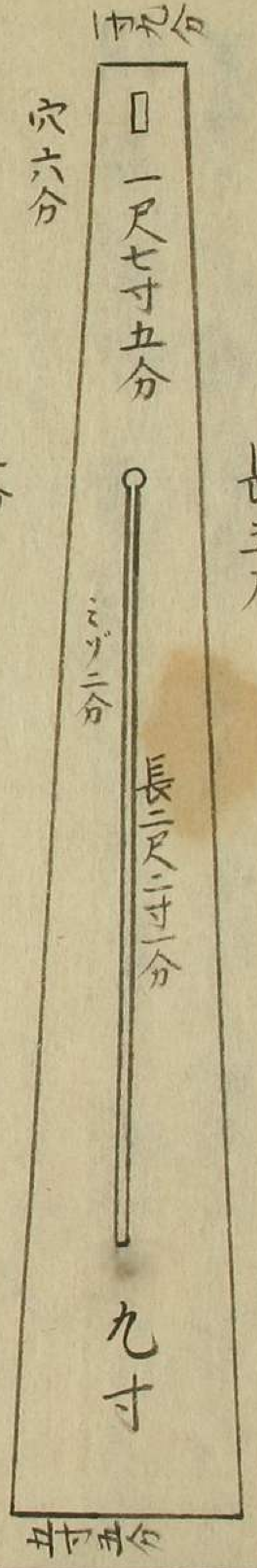


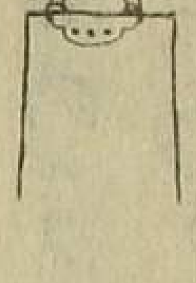
右のごとく墨をもつて書くといへども大凡床畫の図より向ふを
三ツ一ト分ニと横を定め二ツ割一分を竪を定てよし是雨く古
人の寸法に合ふなり思ひの外違ひあり其差異あり
同床へ置所ハ畫を用十九目廿一目なりと古法にいへり是薄板
と床の横に打之し居つれとこし　かのつらに古法を
合ふなりとも床中央に居るとも好み居し

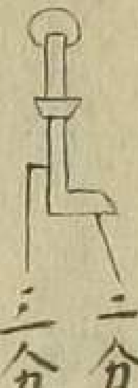
一 水撥（スイハツ）寸法　又垂撥トモ書

長五尺

厚上三テ三分下二テ二分





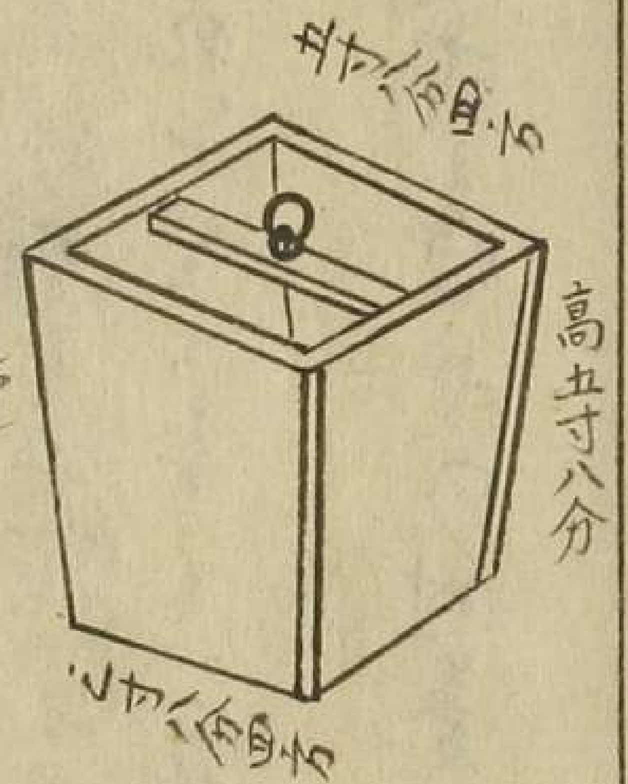


又上ヲ如此ニシタルアリ理方ヨシ

水撥ハ壁（カヘ）床（トコ）へ掛るものなれとも張（ハリ）つけ床にうけを
用ゆるものにて花に露おろしつけぬれ殊ハ床のうちぬれぬやうに
見えなくさらふ小花を生るものにむ時ハ御前ニて掛へし
落板ハ是も床へ置へし板床ならは板にかまひなし

一 釣瓶寸法

鉄鐶（テツリワン）



又　高六寸八分　口五寸八分
ソコ四寸八分
中手　八分二六分
此寸法アリ好人ニヨリ可用

○木ハ出来合をも用ふ古く晒（サラシ）たる物よし板ならハ合目
宜しさし候へし
○縄ハ蕨（ワラヒ）縄なり志ゆろ縄もよし打結（ヒモ）なとハ用へからす
○釣瓶ハ床かけにしつけ三ツ打一ツ目の所へ釣中ニする床
縁（フチ）よりかけ掛中にて間上二打目と二打目ニ居へし
○釣瓶中に置て生る時ハ縄ハさらりと側（カタワラ）に垂もとし
一ツ釣りても用又掛花入にてもなら垂花入にても一ツ生るさ
杯の時ハよくとおし節をかせ候へし

一釣舟の花ハ太刀釣なり高さハ人並に見て座の
ころあひにかくべしと古法に之ありまた三ッ打一打目たるべし
かるべし
一床の中打釘打所ハ床框の下居際より三尺六寸あがりに
之へし其中打ここへ打べし床の大小により恰好よく見
たるべし又柳の釘同じ
又床縁の柱へ打釘ハ花生掛と思ふ人多しこれ床の
わきをさへ人高く懸なし掛緒の時印籠或ハ拂子袈裟
なと掛るための物なれども本来花生掛と心得べ
くハ是に花を生るなら床の外へ柱に懸ぬやうに
すべし
一小笠原家礼式に婚礼の時愛敬のちをと掛る釘と見えたるむべし

一釣花生ハ落板小かさね瓢ハ是に用る
一花器ハ掃るとひよく洗ひきよめて生べし竹なとハ
濡らすやうにもすべし うすくも水をかくるべく
一青磁の花器ハ洗ひ拭く水を持せぬが古法之
一銅器ハ自然と汗といふ物なり
一瓢ハ拭ふやうにして水をもたせぬと
一焼物ハ随ふ水をさすべし
一落板に水のうかぬを嫌ふ随ふ拭ひとるべし
一竹の花生ハ切句といへども性能によく花生ふるに割あるべし
是切べしと古人の傳なり竹ハ用心あるべし

○四季花拵同繕様之秘事
一夏ハ水腐(クサリ)やすし梅雨(ツユ)の時分水を壷(ツボ)に繕へ炭(スミ)を一塊(カタマリ)
ちと焼て水中に入て花を繕へしよくたもつへく
又定中水ふる薬ハ水中に硫黄(イワウ)を入へし又酒なとへ
きとよし水ふりしそ
一牡丹ハ折口をちとかく焼くへし水中に蜜(ミツ)を入てよし
花久しくたもつ
一萩ハ水あけかたし水之湯に生て後水に挿へしまて
あけかねる花ハ少し湯にひたし茎(クキ)を焼くへし
一海棠(カイトウ)ハ切口を薄荷(ハツカ)の葉にて包(ツヽ)ミ生へし花久し

一秋海棠ハ竹の花入を忌へし竹に生れハしほミ安し又
茎(クキ)の節くを小口のきハかくかしつけて割竹ふ
いけくとし明日(アス)挿(イケ)んと思ふ花ハ夕切てよく水に入置へし
花葉しほまず
一蓮ハ切つきの所を糸にて縛(クヽ)り切りたる後逆(サカサ)まにして
切口へ泥(ドロ)をぬり置けハよくたもつ
一河骨ハ葉茎とりふ弱(ヨハ)り安し切口へ山椒(サンシヤウ)を割て生へし
又切口熱湯(ニヘユ)へつけ後冷水に移(ウツス)へし又茎を指(ユビ)にてひし
き揃へ水の中へ入置て生置ハ又もとのことし水に
むらし置けて花やふよく持もの也

一燕子花(カキツハタ)曲(マゲ)んと思ハヽ我のごとく糸にて結とつけ全体(センタイ)
水中にひたし置けハ一夜のうちに思ふやうになるべく
一芦ハ酒にて生べし水中へ酒をさしてもよし茎を
折て切口を酒につけ火にあぶりてもよく活る事
うつし置べし
一紫陽花眼皮の類ハ根をつぶして焼て生べし
一牡丹芍薬を切時瑞をいかむとして
一木槿ハ朝咲て夕にしほむとも花活居べし
一寒竹芦の葉巻て見苦しき時ハ竹の内へ水を
と活け用べし枯ても能く甚用なり

一木草の根を焼くにハむしろ本やうにて葉を焼くべき
又焼かずと夏秋ハ焼くべからず　水草を焼くことなかれ中にハつけべし
一花のつぼミ開かざる時ハ蜘の巣をおし巻く
置しかバ花ひらくなり急入用の時なり
一椿の蕊落る時ハ花中の芯の中へ塩をおし入
置し花落ぬものなり
一水仙切りて葉のつゆハかならず一夜程ひたし置て
葉こはくなりて活ばよし
一赤つばき白くせんと思ハヽ硫黄(イワウ)をいぶしかくべし白く
も咲けりその花ハ斑宅などの花なる

ことに白花なるは時めくものなり
一葦の花白き色に咲けるは術者賞して花茎(ヅル)を
見よそ豎(アス)咲つきし花を愛しまたは生けつるものと婦井の
中へ投し翌日も生れたるを時茶席へ掛べし
一畳に切くしたれたり金箔のよきにかくしとけし
なとはけ紫ひとし花道にふかなりさるは一枝にも花
のみに挿く飾らしとけては花葉とはさかへなるこ
とくふなることのなり
一株の枝横にふる蛇犬ならし自由ふならる

文人入江玉蟾(セン)子は同郷(キヤウ)にして南馬にて
鬱(ムチウツ)あられしうて壮(ソウ)年の時より医術に
あそびしが尊く持藝(キケイ)多しといへども鎖(ツイ)失(リシ)に
花を好むより一瀬(リロ)なる享保の中比の人
瀧川維(イ)舟翁あり此人や茶道は千家正統(トウ)の
系(ケイ)譜(フ)ありて花道をもこれに委しと蟾子耳(ニ)
きゝしかば此翁(ヨキナ)にはじめてし門にありしことし
良(レヨリ)とつける師も更紙切を兼しく修する所の
書口受(シユ)を承るの一巻を秘(ソコ)されて伝へて千家

花道の事を遠しけれは奥秘を構しむや
子華絶命なりしに其刻に追福の立瓶といふもの
蝶子の門の徒をあつめ聚会を此くりして日々一瓶を
弄ぶ深けれは別て此らは忘る気はなき既に
好手の名あり此あつまりと知れるもの医生福田氏
立益と予の弥かし蝶子の高名八経のなれは所すかし
く予る交りを歩まぬそのなく其門人既百余輩
中にも親あり理何ことの不志と同しうしく
一家の継を持しせん事を常ひとて
再ひ図梓しそゆるされは何そ聊つつさ事もや

あらんと予筆を辞しくもさると企てその
門人のねんころしと懇く櫻木に壽さるる事を
呈跋にあるとて事にちらぬ
明和四丁亥冬日
東都葛飾三橋に
庵捨巻珉雪老漁書

東都

撰者　入江玉蟾

補助　河邨珉雪

明和五戊子仲春日

書林

安永六丁酉年菊秋月初旬寫之

琉波軒渚書